



十字架の検証

と十字架との出会い

キリストの十字架の意味と影響

エイドリアン エベンス

十字架の検証と出会い
キリストの十字架の意味と影響

親愛なる友 *Tor* と *Azadeh* に捧げる

印刷 : fatheroflove.info

2019年 8月

コピーライト : エイドリアン エベンス 2019

adrian@life-matters.org

目次

録1巻 父よ、彼らをお赦してください.....	5
録2巻 十字架にかけろ！.....	12
録3巻 彼らの苦しみにおいて、主も苦しまれた.....	17
録4巻 わたしと共に1時間見ていられなかったのか？.....	26
録5巻 あなたは犠牲や捧げ物を望まれなかった.....	31
録6巻 私たちには規律がある.....	48
録7巻 荒野でモーゼが蛇を上げたように.....	65
録8巻 神よ、あなたの道は聖所の中にあります.....	74
録9巻 セラ（Selah）.....	83



父よ、 彼らをお赦してください

深い後悔の念を誘発しながら、私の心に映像が次々と蘇りました。周囲の人々との問題を抱えたやり取りの数々が記憶として積み重なり、それが魂に重くのしかかっていました。私は正直に平和を追求していました。最近の自分の感情的な爆発を振り返ると、自分に対する嫌悪感と、「今の自分とは違う人間になりたい」という強い願いが湧き上がってきました。その時、私の心にくっきりと浮かび上がった言葉は「赦し」、そしてそれを必要としている自分でした。

人生において、自分という人間は必ずしも、自分が好きな人間ではないと気づく瞬間に立ったことがありますか？そして何度も自分を変えようと試みたのに、結局は同じ場所に戻り、同じ重苦しい感情を抱えている——そんな経験はありませんか？自分の中にある不快な姿から、どうすれば逃れられるのでしょうか。

この経験は、聖書の言葉が真実であることを証明しています。

「義人はいない。ひとりもない。(11) 悟りのある者はいない。神を求める者はいない。(12) すべての者が迷い出て、皆無益な者となった。善を行う者はいない。ひとりもない。」

ローマ人への手紙 3章10～12節（新共同訳参考）

多くの人は、自分の欠点から目をそらし、他人の欠点に焦点を当てること、この状態から逃げようとして、私たちは皆、性格的な欠点を抱えているため、困難な状況に陥ったとき、他人のせいにする理由を見つけるのは簡単なことです。

しかし、このようにして魂の平和を求めても、否応なく人間関係を損ない、最終的にはより深い悲しみと孤独を招くこととなります。

魂の平安と自由への唯一の道は、自分自身の問題に責任を持ち、造り主に赦しを求めることです。

それから、イエスは口を開き、彼らに教えられた。(3)「心の貧しい者は幸いである。天の御国はその人たちのものである。(4) 悲しむ者は幸いである。その人たちは慰められる。」 マタイによる福音書 5章2~4節

まさにこの状態が、私の姿でした。

私は自分の利己中心的で、人の関心を求めるあまりに他者に与えてしまった痛みを心に痛めていました。

私はクリスチャン家庭で育ち、イエス・キリストに明らかにされた神の愛について教えられてきました。子どもの頃、何度もこの言葉を耳にしました。

「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」マタイによる福音書 11章28節

イエスのもとに行けば、重荷から解放され、安らぎを得られるという考えに勇気づけられました。私はキリストの生涯、とり

わけその死にまつわる最後の場面を思い返し始めました。十字架の物語には、自らを救う力が尽きた魂にとって計り知れない力があります。それは何百万もの人々の人生を変え、平和と希望を与えてきました。

しかし、そこには一つ不可解なことがあります。なぜ 2000 年も前の 一人の無実な人間に対する裏切り、拷問、そして殺害の物語が、私の魂に平安をもたらすのでしょうか？

それは、今の私とどう関係があるのでしょうか？

最初、この物語は直感に反するよう感じられました。静寂に包まれ、甘い香りの漂う香炉と穏やかな音楽、そして自然の美しさに囲まれた空間に入る方が、平安を得るのにもっとふさわしいのではないか——そう思えたのです。

しかし、魂の中で十字架の物語が息づき始めると、私達は、兵士たちの怒鳴り声や、鞭がキリストの背中を打ちつける鋭い音がし、重い木の十字架が地面に落ちる鈍い衝撃音が聞こえるようになりました。救い主がその重さに耐えられず倒れるのです。群衆の嘲りの声がこだまし、残虐な場面に喜びを覚えるゆがんだ顔が目映ります。

この謎の秘密は何でしょうか？なぜこの物語が私に平安を与えるのでしょうか？

なぜ殺害という出来事から静けさが生まれるのでしょうか？

視線をそらしたくなる強い衝動がある一方で、この劇の結末を見届けるよう引き寄せられる力もありました。その残虐さは奇妙なほど見覚えがあり、同時に恐ろしいものでした。私たちは

「されこうべの場所」ゴルゴタにたどり着きます。キリストはおとなしく、この拷問の道具の上に横たわります。茨で編まれた嘲りの冠が頭に打ち付けられ、顔から血が流れています。同じ刑罰を受ける他の者たちは必死に抵抗し、避けられない運命を少しでも遅らせようとします。救い主の背中は、先ほど受けたむち打ちによって原形をとどめていません。

しかし、この人は一体何をしたのでしょうか？

福音書を少し読むだけで、この方の生涯が思いやりと優しさに満ち、天の父なる神の愛と慈しみを最も美しく描き出していることが分かります。それなのに、どうしてこの人がこんなにも野蛮な扱いを受けなければならないのでしょうか。

金属が金属を打つ大きな音が響き、私たちの注意は釘打ちの場面に引きつけられます。

多くの人を祝福してきた、その優しい手に杭が打ち込まれます。イスラエルの埃舞う道を歩んできた尊い足も、今や木の十字架に貫かれ、固定されます。十字架は持ち上げられ、乱暴に穴に差し込まれます。この出来事は聖書に記録され、今後 世界中の何百万もの人々に語られ、読まれていくのです。

罪の重荷から解放されたいと願いながら、この十字架の出来事を思い巡らすうちに、私の心はこの無実で、また神の御子である人間に対する同情で満たされました。私の思いはゲツセマネからカルバリまで、彼の足跡をたどります。ローマ総督ピラトの言葉が心に響きます。

「見よ、この人だ。」ヨハネによる福音書 19章5節

私は彼が園でよろめき、血の汗を流しながら苦しむ姿を見ました。弟子たちが逃げ去り、群衆のなすがままにされる姿を見ました。群衆がバラバを選び、神の御子を十字架につけようとする様子に驚きました。

なぜ彼らはこんなことをするのでしょうか？このようなひどい仕打ちを受けるどんな悪事を働いたのでしょうか？

彼らはイエスの服を脱がせて、赤いマントを着せました。(29) そして、いばらで冠を作って頭にかぶせ、右手に棒を持たせました。彼らはひざまずいて、「ユダヤ人の王さま、万歳！」とあざけりました。(30) そのうえ、イエスに唾をかけ、棒を取り上げて頭をたたきました。(31) こうしてさんざん笑いものにしたあと、そのマントを脱がせて元の服を着せ、十字架につけるために連れ出しました。— マタイの福音書 27:28-31

この冷酷な人たちを責めたい気持ちがこみ上げましたが、ふと自分が人に冷たくしてきたことを思い出しました。そう気づいたとき、私も彼らと同じ罪人なのだと気付いたのです。そのとき思い出したのはイエスの言葉でした。

「はっきり言うておく。私の兄弟であるこれらの最も小さいものの一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。」— マタイの福音書 25:40

私は他人を嘲笑ったことがなかったでしょうか。残酷な映画を観て、悪役が倒されるのを喜んだことがなかったでしょうか。自分を傷つけたと思った人に、心ない言葉を吐いたことがなかったでしょうか。読み進めるにつれて、罪の意識が増していき

ました。十字架のそばで死にかけていた二人の男のことを思ったとき、私はそのうちの一人の言葉に深く共感しました。

「俺たちは自分のしたことの報いを受けているんだ。でも、この方は何も悪いことをしていない。」— ルカの福音書 23:41

今まで人を責めたり、邪魔だと思ったり、罰してきた気持ちが、自分自身に戻ってきました。そして、あの言葉が思い起こされたのです。

「人を裁くその裁きで、あなたも裁かれる。人を量るその基準で、あなたも量り返されるのです。」— マタイの福音書 7:2

永遠の時の中で、気づいたとき、私は十字架に釘付けになっていました。実際には二千年の時間が流れているのに、あたかもその場に居合わせているように感じたのです。周りの騒がしさが消えて、ただ神の子を見つめました。そして、その口から出た言葉を聞いたのです。

「父よ、彼らをおゆるしてください。自分が何をしているのか分かっていないのです。」— ルカの福音書 23:34

その言葉の意味が魂に深くしみこんだとき、私の中に希望の火花が灯りました。長い間求めてきた赦しが、今、目の前に豊かに差し出されているのです。涙を流しながら造り主の前にひざまずくと、愛に満ちたその御顔を見上げ、私の心は溶かされました。その顔には、ほんの一かけらの非難もありませんでした。

私は、自分の罪深い生き方がイエスが十字架で苦しんでいる理由の一つであることを強く感じました。それでも、そこには責める言葉はなく、ただ愛と赦しがあったのです。イエスは、私が与えた苦しみを責めることはなく、自由に赦してくださったのです。

問題はただ一つ——私がそれを受け入れるかどうか。赦されていると信じるかどうか。私は両手でその赦しを受け取り、永遠のいのちという受け継ぐべきものを自分のものとししました。イエスに、「今までのことを本当にごめんなさい。私の人生の主となってください」と告げた瞬間、心に平安が訪れました。それは癒しであり、静けさであり、自由をもたらしものでした。私を押しつぶしていた罪の重荷は消え去り、言葉では言い表せないけれど、受け入れた者だけが知ることでできる喜びが魂にあふれました。

生ける水の泉のように、感謝の涙があふれ出しました。ようやく私が探し求めていた安らぎを得たのです。感謝の思いは計り知れず、私は喜んで救い主の主権に身をゆだねました。

これこそが、私の祝福に満ちた美しい十字架との出会いでした。そこには多くの問いが湧きあがります。どうしてこんなにも恐ろしい出来事から、こんなにも美しいものが生まれるのでしょうか。二千年前に起きた出来事が、どうして今日のこのように迫ってくるのでしょうか。何がそれを可能にしたのか。そして、なぜあなた自身の人生にとって、この「十字架との出会い」が重要なのでしょうか。

さあ、一緒に十字架を検証し、見てみましょう。

十字架にかけろ！

「…人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡され、死刑に定められ、(19) そのあと異邦人に引き渡されて、侮辱され、鞭打たれ、そして十字架にかけられる…」— マタイの福音書 20:18-19

なぜイスラエルの指導者たちは、イエスをそんなに憎んだのでしょうか。なぜ彼らはイエスを滅ぼそうと必死になったのでしょうか。どうして人々に喜びと幸せをもたらした方が、彼らにとって脅威となったのでしょうか。

「その方こそ、すべての人を照らすまことの光であった。(10) 彼は世におられ、世は彼によって造られたのに、世は彼を知らなかった。(11) 彼は自分の民のところに来られたのに、その民は彼を受け入れなかった。」— ヨハネの福音書 1:9-11

当時の指導者たちは、実は人類全体を代表していました。それは、神の子・父に油注がれた方に対する、墮落した人間の自然な態度を示していたのです。

「彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出た根のように成長した。彼には私たちが慕うような姿も輝きもなく、(3) 人々からさげすまれ、見捨てられ、悲しみに慣れ親しんだ方であった。人が顔をそむけるように軽蔑され、私たちは彼を尊ばなかった。」— イザヤ書 53:2-3

「地の王たちは立ち構え、支配者たちは共に謀りごとをめぐらす。
主と主に油注がれた方に逆らって、(3) こう言う。『彼らの束縛を
断ち切り、縄を捨て去ろう。』」— 詩篇 2:2-3

十字架の物語は、人類の歴史の中で最もはっきりと、人々が神の子にどのように向き合ってきたかを示す出来事です。私たちがアダムから受け継いだ本性が、ここにあらわになりました。

この出来事は、パウロの言葉を裏づけるものでもあります。

「肉に支配された心は神に敵対します。神の規律に従うことはなく、また従うこともできません。」— ローマ人への手紙 8:7

この敵意はいったいどこから来たのでしょうか。初めに神は、愛をもってアダムとイブに教えました。「園の中央にある木からは食べてはならない。食べれば死ぬ」と。もしその実を食べるなら死に至り、存在しなくなる、と。園にその木が置かれていたのは、アダムとイブが自ら選んで創造主に仕える機会を持つためでした。もし選択の自由がなければ、彼らには意思を行使する余地はなかったでしょう。しかし、神に背を向けることは、いのちの源から切り離されることを意味します。

神の言葉はどのように理解されるべきだったのでしょうか。それはアダムとイブの幸せのため、限りない愛と配慮から与えられた言葉でした。しかしサタンは蛇を用いて、別の動機をイブに吹き込みました。

「あなたがたは決して死ぬことはない。(5) 神は、あなたがたがそれを食べると目が開けて、神のように善悪を知る者になることを知っているのです。」— 創世記 3:4-5

サタンは「神は自分勝手に、人間が本当の可能性に到達するのを妨げている」とほのめかしました。こうして神の言葉の意味がねじ曲げられたのです。「あなたは死なない」というサタンの逆説的な主張は、実際には「神はあなたを死なせる」という意味を含んでいました。つまり、アダムとイブは「自分たちは必ず死ぬ」と理解するのではなく、「神が自分たちを殺す」と理解したのです。この違いは決定的でした。

アダムは、妻イブが罪を犯したことで神が彼女を殺すのではないかと思い込み、その誤った考えのもとで実を取って食べました。神が専制的であるという思いに駆られ、アダムは憎しみと反逆の心で神に立ち向かい、



アダムは、妻イブが罪を犯したことで神が彼女を殺すのではないかと思い込み、その誤った考えのもとで実を取って食べました。神が専制的であるという思いに駆られ、アダムは憎しみと反逆の心で神に立ち向かい、イブと運命を共にしようとしたのです。同時に、蛇の言葉が本当かもしれないという思いも彼を大胆にさせ、神に逆らって実を取る行動に出ました。

ここに、人間の神への憎しみの源があります。アダムは神の性質を誤って理解し、その誤解に基づいて行動しました。「神は

自分の利益を守るために人を殺す」と信じたことが、アダムの態度に現れました。

「私は園であなたの声を聞いたので、裸であることを恐れて身を隠しました。」(11) 神は言われた。「あなたが裸であることを誰が知らせたのか。食べてはならないと命じた木の実を食べたのか。」(12) アダムは言った。「あなたが私のそばにくださったあの女が、木から取ってくれたので、私は食べたのです。」— 創世記 3:10-12

アダムは「神が自分を殺しに来た」と思い込み、恐れに支配されていました。問いただされたとき、彼は責任を妻と神に転嫁しました。つまり本質的にアダムはこう言ったのです。「もし誰かが死ななければならないなら、妻を殺してください。そして、妻を造ったあなたご自身も責めを負うべきです。」

この考えの根底にあるのは、「神は自分の利益を守るために殺す方だ」という誤解です。出口がないと思い込んだアダムは、自分の身を守るために妻と神を死に定めたのです。注目すべきことは、墮落後の人類への神の言葉はすべて「神と人との仲介者」である御子を通して語られたことです（ティモシ第一 2:5）。つまりアダムは「自分を誘惑する女を造った」との理由で、御子を死に定めたのです。「あなたが私のそばにくださった女」という言葉には、4000年後に叫ばれる「十字架につける！」という叫びの種が含まれていました。

この種はアダムの心に深く刻まれ、彼自身も気づいていませんでした。もし御子が「あなたは私を殺そうとしている」と責めたなら、アダムはその子孫と同じように答えたでしょう。

「なぜわたしを殺そうとするのか。」群衆は答えた。「あなたには悪霊がついている。だれがあなたを殺そうとしているのか。」

— ヨハネの福音書 7:19-20

アダムは「そんな大げさな」と完全に否定したに違いありません。この死の種を取り除く唯一の方法は、それが現れ出ること、そしてアダムが御子への敵意を悔い改めることでした。

この死の種は、老弱男女、すべての人間に受け継がれています。目に見えない形で、私たちのうちには自然な反逆心と、神の子を傷つけたいという欲望が潜んでいます。だからこそ、イエスはすべての人に拒まれ、軽んじられたのです。それは2000年前に実際にイエスを十字架にかけた人々だけではありません。

このことの密接な関係性は非常に大きく、ゆえに十字架の原則は歴史上一日の出来事にとどまらず、人類の歴史のすべての日々に広がっているのです。

第3章 彼らの苦しみに おいて、 主も苦しめられた

地に住む者たちはみな、世の始めからほふられた小羊のいのちの書に名が記されていない者は、彼を拝むことになる。 — ヨハネの黙示録 13章8節

イエスが十字架について語られたとき、それは多くの人が理解している以上に広い意味を持っていました。

それからイエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従いなさい。」 — マタイによる福音書 16章24節

十字架の原則は「自己否定」にあります。イエスはご自身の十字架刑に至る出来事の中でこれを示されました。主は侮辱や鞭打ちに対して身を守ることなく、それを忍耐強く受けられました。それは計り知れない苦しみを引き起こしましたが、主は耐えられたのです。宇宙のすべての力がご自分の手にあったにもかかわらず、一瞬でその苦しみを終わらせることもできたのに、そうはされませんでした。それは加害者たちが思い直すための時間をできる限り与えるためでした。キリストは、彼らが悔い改め、四十年後に訪れるエルサレムの滅びに巻き込まれて自らを滅ぼすことのないよう望まれたのです。

現実には、宇宙のすべては神の子によって保たれています。

「キリストは万物より先にあり、万物はキリストにあって成り立っています。」— コロサイの信徒への手紙 1章17節

「御子は神の栄光の輝きであり、神の本質の完全な現れであり、その力ある言葉によって万物を支えています…」— ヘブライ人への手紙 1章3節

私たちを造られたお方として、キリストは優しい親のように、すべての人々を深く思い、男も女も子どもも、一人ひとりが幸せで健やかで平和な環境で育つことを願っておられます。その御心は、すべての源である御父の御心の現れでもあります。ですから、一人の子どもが痛みを受けるたびに、キリストも痛まれるのです。人類のすべての苦しみに対して、主の心は痛んでいます。預言者イザヤはこう語りました。

「彼らが苦しむときは、主も苦しまれ、御顔の御使いが彼らを救った。主は愛とあわれみによって彼らを贖い、昔の日々すべてにおいて、彼らを背負い、担われた。」— イザヤ書 63章9節

イスラエルという国として、また個人として彼らが受けたすべての苦しみを、キリストも共に経験されました。しかしキリストが苦しんだのはイスラエルのためだけではなく、この地に生きるすべての人のためでした。

子どもを持つ方にお尋ねします、あなたの子どもが深い痛みの中にあるとき、どのように感じますか？ それはあなたの心を突き刺し、大きな苦しみと悲しみをもたらします。

では、もしあなたの子どもの一人が、あなたの他の子どもを傷つけたらどうでしょうか？ それはさらに深い悲しみを引き起こします。あなたは傷ついた子どものために苦しみ、傷を与えた子どもに対して失望するでしょう。

親は、自分の家族以外の誰かが自分の子どもを傷つけたとき、どのように感じるでしょうか？ 多くの人が自然に、その人に罰を与えたいと感じるものです。

では、イエスはご自身の子どもの暴行を受けたとき、どのように感じられるでしょうか？ それは人間の親が感じる悲しみよりも深い悲しみをイエスにもたらしめます。

人間の反応は、加害者に罰を与えることです。しかしキリストにとって、その加害者もまたご自身の子どものことです。彼はその卑劣な行いに心を痛めますが、もしその者から守りを取り去れば、彼らは死んでしまうでしょう。キリストは誰一人として死ぬことを望まれません。

ですから人々が互いに傷つけ、虐げ、殺し合う間も、キリストは沈黙のうちに苦しみ続けておられるのです。

私たちが罪を犯すたびに、それはキリストの御霊の教えに逆らっているのです。

私たちが悪いと知りながらそれを行うたびに、キリストを刺し貫いているのです。

「…そしてもし墮落したなら、彼らをもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。というのは、彼らは自分のために神の子を再び十字架につけて、公然と辱めるからです。」 —ヘブル人への手紙 6章6節

人が配偶者を平手で打つたびに、キリストはその痛みを感じます。子どもが隅で震えながら、父親が母親を殴っているのを見ているときも、キリストはそのすべての苦しみを感じておられます。しかし、キリストは人々に無理やりそれをやめさせることはできません。なぜなら、力をもって強制することでは、悪を行う者の性質を変えることができないからです。それに、もし神が力を使われるなら、それは神ご自身の性質を変えてしまうでしょう。けれども聖書にはこう書かれています。「主は変わることはない」（マラキ書3章6節）。また、人が神に強制されていると感じたなら、かえって反抗し、さらに悪に向かうこともあります。

人間同士が互いに与え合う痛みの中にキリストの苦しみを理解するとき、私たちは十字架の意味を全く新しい光で見ることができます。それはあまりにもまぶしく、もはや以前と同じ生き方を続けることができなくなるほどです。worldometers.infoの統計を考えてみましょう。

世界保健機関（WHO）によると、毎年およそ4,000万～5,000万件の中絶が行われています。これは一日に約12万5,000件に相当します。キリストが、毎日12万5,000人ものご自身の子どもたちがこのように命を絶たれるのを見てどれほどの苦しみを感じておられるか、想像できるでしょうか？ 妊娠を中断する決断をした母親の心の痛みはどうでしょうか？ この数字に含まれる苦しきは、人間の心では到底理解できません。

今日、約3,000人が交通事故で命を落とし、2,800人が自ら命を絶つと言われています。亡くなった人々だけでなく、残された

人々にもどれほどの苦しみがあるのでしょうか？今日も何人の女性や子どもが男性によって性的に虐げられるのでしょうか？統計によると、約2,500万人が人身取引によって奴隷状態にあり、その半数以上が性的虐待を受けています。そのうちの71%が女性と少女です。

今日も、世界のどこかで137人の女性がパートナーまたは元パートナーによって命を奪われます。これらの数字の中で、キリストが受ける苦しみは計り知れません。そしてこれは、世界中で毎日起きている人間の苦しみの、ほんの一部にすぎません。

キリストは毎日、人間の暴力と利己心を耐え忍んでおられます。誰かはこう問うでしょう—「なぜキリストはご自身を救い、この自己犠牲の十字架から降りないのか？」と。キリストにとって、毎日は地獄のような苦しみです。彼を助けるために遣わされた愛する天使たちもまた、人間の残虐な行為を目撃しなければなりません。あなたは天使になりたいと思ったことがありますか？墮落したこの世界の息子や娘たちの世話をしながら、どれほどの悲しみを耐え忍ばなければならないかを考えてみてください。助けを求める人がいないために、虐待される子どもをただ見守るしかない—そんな場面を目の当たりにした天使が、どれほど無力で悲しみに満ちているか想像できるでしょうか？

たとえば、暴力的な夫と暮らす薬物依存の娘を持つ親の立場を考えてみてください。どうすればそれを止めることができるでしょうか？娘を無理やり変えさせることはできますか？指を鳴らしてすべての痛みを消すことができるでしょうか？もし娘が助けを拒むなら、あなたにできるのはただ、彼女のそばに寄り添

い、「愛している」と伝え、暗い谷をともに歩むことだけです。無理やり変えようとすれば、かえって彼女をさらに深い闇に追いやってしまうでしょう。

私たちの天の父と救い主も同じ状況におられます。無限の力を持っておられるにもかかわらず、神は子どもたちの意志を無理やり変えることはできません。私たちが助けを求め、その導きに耳を傾け、従おうとしない限り、神は私たちを変えることができないのです。

この十字架の真理は、人間の考え方とはあまりにも異なるため、理解するのが難しいのです。

そこには自己防衛も自己保存も自己利益もありません。それは、子どもたちのために完全に自分を与え尽くす愛—多くの子どもたちがその愛を拒むにもかかわらず。

多くの人々は、神が自分の苦しみを気にかけていないように見えるため、神に怒りを感じています。しかし、人が神を認めず、神の戒めを守らないなら、どうして神がサタンの攻撃を防ぐことができるでしょう？彼ら自身がサタンに心を開き、神の道を歩むことを拒んでいるのです。

神を信じ、神の道を歩もうとする私たちにとって、キリストの十字架は一日の出来事ではなく、人類の全歴史を通して続く経験であることがわかります。確かにキリストは肉体的には一度死なれましたが、その出来事は、今日もなお人間の罪によってキリストが刺し貫かれているという真理を明らかにする鍵なのです。

「私はキリストと共に十字架につけられました。もはや私が生きて
いるのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです
。」—ガラテヤ人への手紙 2章20節

なぜパウロは「キリストのように」ではなく「キリストと共に」
十字架につけられたと言うのでしょうか？もし「共に」である
なら、キリストはいまも人間の罪によって十字架につけられて
いるのではないのでしょうか？

「苦しめられても見捨てられず、打ち倒されても滅びない。私たち
はいつも、イエスの死を身に帯びている。」—コリント人への第二
の手紙 4章9～10節

なぜパウロは「イエスの死を身に帯びる」と現在形で語るので
しょうか？

それは、キリストの弟子たちが迫害や苦難に遭うとき、キリス
トご自身も共に苦しまれ、彼らの痛みと悲しみに心を痛められ
ていることを示しているのです。

この十字架に対する人間の応答は何でしょうか？キリストの苦
しみを思うなら、自分のために生きることなどできません。キ
リストが毎日耐え難い苦しみの中におられることを知っていて
、どうして自分を喜ばせるためだけに生きられるのでしょうか？

ある日、私はこのテーマを黙想し、キリストの苦しみに圧倒さ
れながら祈りました。「主よ、どうすればあなたの慰めとなり
、あなたを助けることができるのでしょうか？」その答えはこう
でした。「わたしとともに一時間、見張っていられるか？」

親愛なる読者の皆さん、救い主の苦しみを思い巡らしてください。この世で楽しもうとしていることが、あなたの救い主との歩みを遠ざけているのなら、それはキリストの感じておられる苦しみに見合うものでしょうか？この世が今の状態を続ける一秒ごとに、キリストは言葉にできない苦しみを耐え忍んでおられるのです。あなたが息をするその一瞬一瞬が、神の御子が払われた苦しみのゆえに無限の価値を持っています。

キリストのあわれみ深い御心は、決して人を無理やり変えることはありません。ただ、私たちがご自身のもとに来て、休みを得ることを切に待ち望んでおられます。神は私たちに、世界中のすべての苦しみの責任を負わせることはなさいません。また、私たち一人では世界を変えることもできません。けれども、毎日キリストの自己犠牲を黙想し、苦しみの中でも私たちに示される愛と忍耐を思うなら、私たちは変えられ、他の人の弱さや欠点をも忍耐をもって受け入れられるようになります。

永遠の時が流れても、この六千年にわたる十字架の苦しみの全貌は語り尽くせません。その自己犠牲の愛は、私たちの自己中心的な本性を完全にあらわにします。このように十字架を思うとき、人はへりくだって心を柔らかくされるか、あるいはそれを拒み、神の愛の啓示に逆らって心を硬くするかのどちらかです。

あなたは、この十字架に現された神の愛に心を引き寄せられますか？キリストが天地創造の時から霊において殺され続けてこられたことを思い起こしてください。もし二千年前の物理的な十字架がなければ、私たちは自分の心に潜む本当の敵意を知る

ことはなかったでしょう。キリストの死によって、アダムの心に隠されていた敵意の種が完全にあらわにされたのです。

いま、この十字架の意味を知った私たちは、どのように対応するのでしょうか？

わたしと共に 1 時間

見ていられなかったのか？

キリストの十字架の物語は、人としての感受性を少しでも残している人にとっては、正面から向き合わざるを得ないものです。動物や人を殺すことを職業としてしまった不幸な人々にとって、その感受性は危険なほど鈍くなってしまっています。

弟子たちが、自分たちのメシヤが人々の前で神の国について力強く語る姿を見ていたとき、彼らはその方と共にいることを誇りに思っていました。しかし、カルバリへと十字架を背負って歩まれる時、それは全く違う状況となりました。十字架の辱めと死は、人間の本質が関わりを避けるものです。このことは、ペテロの行動に明らかに現れています。

その時から、イエスは御自分の弟子たちに、必ずエルサレムに行き、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目によみがえらなければならないことを示し始められた。するとペテロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めて言った。「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません！」

— マタイ16:21-22

ペテロは、イエスが十字架について話すことすら望まず、ましてや実際に苦しみに遭うことなど受け入れられませんでした。イエスが鞭打たれているとき、ペテロは弟子であると見なされそうになり、彼はそれを否定しました。

門口に出て行ったとき、別の女が彼を見て、そこにいる人々に言った。「この人も、ナザレのイエスと一緒にいました。」すると彼は再び誓って否定した。「この男は知らない人です！」 — マタイ 26:71-72

キリストの苦しみを真実に受け入れるということは、自分自身を完全に明け渡し、主と共に歩み、他者のためにその苦しみに与ることも含まれます。ポールはこの現実をしっかりと理解し以下のように言っています。

それどころか、私の主キリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損とと思っています。私はキリストのためにすべてを失いましたが、それらはちりあくた同然だと考えています。それは、私がキリストを得て、律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち信仰に基づいて神から与えられる義を持ち、キリストにあって見いだされるためです。私はキリストを知り、その復活の力と、その苦しみにあずかることを知り、その死に倣う者となるのです…。 — フィリピアンズ3:8-10

この苦しみから独立して「自由」に生きたいなら、人はその現実を無視するか、眠って忘れるしかありません。楽しみや快樂、パーティーに満ちた「楽しい人生」を送りたいなら、十字架

を忘れなければならないのです。たくさんの不動産を所有し、富を築こうとするなら、十字架を忘れるように働かなければなりません。なぜなら十字架は、そうしたものをすべて虚しいものと見せるからです。

イエスは弟子たちを備えさせるために、十人の処女のたとえを語られました。

そのとき、天の御国は十人の娘に例えられます。彼女たちはそれぞれともしびを持って花婿を迎えに出て行きました。(2) そのうち五人は賢く、五人は愚かでした。(3) 愚かな娘たちは、ともしびは持っていましたが、油を持って行きませんでした。(4) 賢い娘たちは、ともしびと一緒に器に油を入れて持って行きました。(5) しかし、花婿が来るのが遅れたので、皆うとうとして眠り始めました。— マタイ25:1-5

その後すぐに、イエスと弟子たちは木曜の夜に過越を祝い、ゲツセマネの園に祈りに行きました。イエスの様子は非常に重苦しく、弟子たちもその苦悩を感じ取っていました。そこでイエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴い、さらに奥まった所に行って祈られました。

そしてペテロとゼベダイの子二人を連れて行かれたが、悲しみもだえ始められた。そのとき、彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」(39) 少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせ

てください。しかし、わたしの願うようにではなく、御心のまま
になさってください。」— マタイ26:37-39

弟子たちはイエスの深い悲しみを見ていながら、眠ってしまいました。苦しみの中で祈られた後、イエスは眠っている弟子たちのところへ戻り、こう言われました。

それから弟子たちのところに来て、彼らが眠っているのを見て、
ペテロに言われた。「あなたがたは、わたしと一時間でも一緒に目を
を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らないよう、目を覚ま
して祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。」
— マタイ26:40-41 (KJV)

かつて「主のために死ぬ覚悟がある」と言ったペテロも、イエスが苦しみに押しつぶされているとき眠ってしまいました。なぜでしょうか？

それは、人間の自己中心的な欲望を生かし続けるためには、キリストの苦しみに目を閉ざして眠らざるを得ないからです。もしその苦しみに目覚め、共に感じるなら、わたしたちは目を覚まし、世の望みや欲望を手放すことになるからです。

私たちは毎日、イエスの犠牲を思い起こすように招かれています。旧約聖書の礼拝では、朝と夕にいけにえが捧げられていました。朝のいけにえは午前9時ごろ、夕のいけにえは午後3時ごろでした。これらの時は、キリストの苦しみを思い起こし、祈り、言葉や行いによって主を刺すことをやめる恵みと力を求める機会なのです。

この犠牲については後でさらに触れますが、まず注目すべきは、キリストの弟子たちが一日の特定の時に祈るために集まり続けていたことです。

ペテロとヨハネは九時の祈りの時に、共に宮に上って行った。

— 使徒3:1

これは夕のいけにえの時間であり、使徒たちはただ祈り、キリストの苦しみを思い起こし、主だけのために生きる恵みを求めていたのです。

イエス・キリストの弟子であるあなたにもお願いしたいのです。どうか一日に二度立ち止まり、世界中の子どもたちの苦しみを背負っておられる父と救い主の大いなる悲しみに思いを馳せてください。そして、今日もイエスは私たちに問いかけておられます。

「あなたは、わたしと共に一時間 目を覚ましていてくれますか？」

あなたは犠牲や

捧げ物を望まなかった

十字架の本当の痛みが見過ごされてしまう大きな理由のひとつは、旧約聖書における犠牲制度の存在にあります。

「イスラエルの全ての会衆に告げよ。この月の十日に、各人はその父の家ごとに羊を一頭、家ごとに羊を取らなければならない。(4)もし家族がその羊を食べきれないほど少人数なら、その家の隣人と共に人数に応じて分けなければならない。(5)あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。羊の中からでも、やぎの中からでもよい。(6)それをこの月の十四日まで飼い、イスラエル全会衆は夕暮れにそれを屠らなければならない。(7)そしてその血を取り、羊を食べる家の二本の門柱と鴨居に塗らなければならない。」(出エジプト記 12:3-7)

「わたしのために土の祭壇を造り、その上にあなたの焼き尽くす捧げ物と和解の捧げ物、羊や牛をささげよ。わたしが名を記すところではどこでも、わたしはあなたのところに来て、あなたを祝福する。」(出エジプト記 20:24)

これらの言葉から受ける印象は、「神は人々に動物を殺して犠牲としてささげることを望んでおり、そうすれば祝福を与える

」というものです。バプテスマのヨハネがメシアを世に紹介したとき、彼はこう言いました。

「その翌日、ヨハネはイエスが自分のもとに来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊。』」——ヨハネによる福音書 1章29節（ヨハネ 1:29）

もしイエスが「神の小羊」として犠牲になったのなら、「神がご自分の怒りを鎮めるために御子を殺すことを望んだのだ」と多く的人是は考えてしまいます。この枠組みの中では、人類は神の子を殺したのではなく、神が望まれたことをしたことになります。

さらにイザヤはこう書いています。

「しかし、それは主のみこころであって、彼を砕き、病にかからせた。彼が自分のいのちを罪過のささげ物とするなら、彼は子孫を見、その日を長くする。主のみこころは彼の手によって成し遂げられる。」（イザヤ 53:10）

このような表現から「神は御子を犠牲として砕くことを喜ばれたのだ」と多くの人々が受け止めます。そして「神の義を満たすために、罪人である私たちの代わりに御子が死ななければならなかった」と考えられてきました。実際、多くの賛美歌も「十字架の死によって神の怒りが満たされた」と歌っています。こうした考えは、十字架の意味を根本からねじ曲げてしまいます。神を「死を要求する方」と描いてしまうことで、私たち自身の中にある反抗心や憎しみの真実が見えなくなってしまうのです。

ある人気のある讚美歌はこの考えを以下のように表現しています。

キリストのみにある みずから肉をとられ 無力な幼子のうちに
神の満ち満ちたご性質が宿る この愛と義の賜物は 救いに来られた方を
人々は嘲った やがて十字架の上でイエスが死なれたとき 神の御怒りは
満たされた すべての罪が あの方の上に置かれたから キリストの死の
うちにこそ 私は生きる、いま生きている

この「十字架」という考え方は、物事を完全に捻じ曲げてしまっています。それは、神が死を要求する存在として描かれ、第二章で述べたような、私たちの本性に関する真理を覆い隠してしまうのです。もし神が、私たちの罪のために御子の死を必要としたのだとすれば、私たちが本来抱えている神への憎しみは見えにくくなります。第一に、イエスを殺したのはユダヤ人とローマ人だけだと理屈づけることができます。第二に、彼らは単に、いけにえが成し遂げられるために神が望んだことを行っただけだとも言えるかもしれません。このような思考が、次に述べるような考え方を生み出してしまうのです。

写本を修復・翻訳し、真正性を確認した専門家によれば、いわゆる「失われたユダの福音書」には、イエスが親しい友人であったイスカリオテのユダに対し、自らの肉体という監獄から解放されたいがためにローマ人へ引き渡すよう頼んだと記されている。

全26ページ——両面に文字が書かれた13枚のパピルス——は、ユダを悪役ではなくキリスト教の英雄として描いている。

この文書の存在は昨日、ワシントンで開かれた記者会見で明らかにされた。記者会見を主催したナショナル・ジオグラフィック協会は、この唯一知られている現存写本を保存する国際的取り組みの一員である。文書は、エジプトの墓にあった石灰岩の箱から、ニューヨーク州ヒックスビルの貸金庫へと至る奇妙な旅の中で、ひどく損傷していた。

「ユダの福音書は、ユダの裏切りの行為を“従順の行為”へと変えてしまうものです」と、文書の解釈に関わったノバスコシア州ウルヴィルのアケイディア神学大学 新約聖書学教授クレイグ・エヴァンス氏は語った。

私たちのうち、聖書を神のことばと信じる者にとって、そのような考えは真理から大きく外れています。しかし、それでもなお疑問は残ります。神はこれらの犠牲を本当に求められたのか？ 神の義は、それを要求するのか？

いけにえや供え物をあなたはお望みにならなかった。あなたは私の耳を開いてくださった。全焼のいけにえも、罪のささげ物も、あなたはお求めにならなかった。詩篇 40篇6節

聖書は明確に、神がいけにえを望まれなかったことを述べています。また、全焼のいけにえや罪のささげ物を要求されたのではないことも、はっきりと記されています。さらに次のように読みます。

「わたしがあなたがたの先祖に語ったのは、また彼らをエジプトの地から導き出した日に命じたのは、全焼のいけにえやささげ物に

ついてではなかった。(23) しかし、わたしが彼らに命じたことはこれである。わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。あなたがたが、わたしが命じるすべての道を歩むなら、あなたがたは幸いを得るであろう。』エレミヤ書 7章22-23節

神は、イスラエルの子らに全焼のいけにえや犠牲をささげることを命じなかったと言われていますが、過越のささげ物を命じ、また犠牲の制度を確立されたように見えるのはどういうことでしょうか。ここで聖書は自己矛盾しているのでしょうか。

あすの今ごろ、わたしはベニヤミンの地から一人の男をあなたのもとへ送る。あなたは彼に油を注ぎ、わたしの民イスラエルの君主とみなさい。彼はペリシテ人の手からわたしの民を救うであろう。わたしはわたしの民に目を留めた。彼らの叫びがわたしに届いたからである。」 (17)サムエルがサウルを見たとき、主は彼に言われた。見よ、これがわたしがあなたに告げたその男である。この者がわたしの民を治めるであろう。サムエル記上 9章16-17節

この物語では、神が預言者サムエルに対し、イスラエルの民の王となる者に油を注ぐよう命じています。直前の文脈だけを見ると、神ご自身がこれらのことを命じておられるように見えます。しかし、より広い文脈では、イスラエルが王を求め、神は彼らの願いをそのまま与えられたという背景があります。

しかし、我々を裁く王を与えてください』と言ったとき、この事はサムエルの気に入らなかった。そこでサムエルは主に祈った。

(7)すると主はサムエルに言われた。民があなたに言うこと、すべてその声に従え。彼らはあなたを退けたのではなく、わたしが彼らの上に治めることを退けたのである。8)彼らがエジプトの地から連れ出したその日から今日に至るまで、わたしを捨てて他の神々に仕えてきたその行いのすべてのとおり、彼らはあなたに対しても同じことをしているのだ。サムエル記上 8章6-8節

聖書は、神がイスラエルに王を与えることを望んでおられなかったが、彼らの願いを許されたのだと確認しています。

イスラエルよ、あなたは自らを滅ぼした。しかし、あなたの助けはわたしのうちにある。(10)わたしがあなたの王である。あなたのすべての町で、あなたを救いうる他の者がどこにいるのか。あなたが王と君たちを与えてくれと言ったその裁き人たちはどこにいるのか。(11)わたしは怒りによってあなたに王を与え、憤りによってその王を取り去った。ホセア書 13章9-11節

神が怒りによってイスラエルに王を与えたとは、どういう意味でしょうか。

神の怒りとは、人が望む誤ったものを、あえて人に持たせることを指します。聖書には、人間が望んだゆえに、神がそのことを人に命じておられる場面がいくつもあります。別の例を考えてみましょう。

主はモーセに告げて言われた。(2)あなたは人々を遣わし、わたしがイスラエルの子らに与えるカナンの地を偵察させよ。父祖

たちの各部族から一人ずつ、そのうちの代表者を遣わしなさい。

民数記 13章1-2節

この箇所だけを読むと、神がイスラエルにカナンの地を偵察させることを望まれたように見えます。しかし、より広い文脈を読むと、別の事実が見えてきます。

あなたがたは皆、私のもとに近づき、私たちの前に人々を送り、私たちの行くべき道や、入るべき町々を偵察させ、その報告を持ち帰らせましようと言った。申命記 1章22節

カナンの地を偵察したいと望んだのはイスラエルであり、神は彼らが望んだとおりにすることを命じられました。では、なぜ神はこのようなことをされるのでしょうか。

しかし律法が入ってきたのは、罪過が増し加わるためであった。しかし罪が増し加わったところには、恵みはなおいっそう満ちあふれた。ローマ人への手紙 5章20節

人の心に罪があるとき、神がまず行われる働きは、その人に自分の罪を示すことです。

人間の心には、自分を欺く力があります。自分自身の罪深さに対して盲目なのです。私たちが神の御心から外れているとき、神は私たちが望むものをあえて命じられることがあります。それらが成長し、その結果として、それがなぜ罪なのかを私たちが気づき始めるようにするためです。しかし神は、その行為が間違っていると本人が知り得る機会を与えずに、これらを行われることはありません。ただ、人々は自分の罪深さに盲目であるため、神の命令を「神が望んでおられるからだ」と解釈し

てしまいます。また、人はそのように信じることを選ぶのです。なぜなら、その方が神を自分たちと同じように見せ、自分の罪深さを正当化できるからです。

第二章で私たちは、死の種がアダムの心の中にあったことを見いだしました。アダムは、自分が死刑に値すると信じた行為の責任を、神の御子に負わせようとし、神が自分を処刑すると恐れしました。死を免れるために、彼はその罪を妻に転嫁しました。つまり、彼は自分の代わりに彼女が死んでもよいと考えたのです。アダムは、神の正義は死を要求すると考えていました。

また彼は、責任は他者に転嫁でき、神が求めると信じた負債を他の誰かが支払うことができると理屈づけたのです。アダムの心の内にあるものを彼自身が理解できるようにするため、神は犠牲制度を命じられました。犠牲制度とは、神の思いではなく、人間が考えていることを反映したものです。犠牲制度は、人間の心を映し出す鏡なのです。この文脈で読むと、聖書が犠牲について語る諸々の箇所が調和して理解できます。

するとサムエルは言った。主は全焼のいけにえや犠牲を喜ばれることが、主の御声に従うことほどに大きいだろうか。見よ、従うことは犠牲にまさり、聞き従うことは雄羊の脂肪にまさる。サムエル記上 15章22節

神が望んでおられるのは、私たちが神の恵みを信頼し、従うことだけです。神は人に犠牲をささげさせたいと望まれたのではありません。しかし、人の心にあるものを明らかにし、その罪深さを示すために、神はそれを命じる必要がありました。では

、なぜ神はモーゼに犠牲制度の細かな指示を与えられたのでしょうか。

あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これらの言葉を、イスラエルの子らに告げよ。(7)モーゼは行って民の長老たちを呼び寄せ、主が命じられたこれらすべての言葉を彼らの前に述べた。(8)すると民は皆一致して答え、主が仰せられたことは、すべて行いますと言った。モーゼは民の言葉を主に持ち帰った。出エジプト記 19章6-8節

主がイスラエルに臨まれたとき、神はイスラエルの民すべてが祭司となり、契約のあらゆる約束を与える神の恵みを信頼することを望んでおられました。しかしイスラエルは、神が「与える」と約束されたすべてのことを、「自分たちが行います」と神に告げました。神がしてくださると言われたことを「自分たちが行う」と申し出たことで、彼らは実際には神に反逆していたのです。

わたしはあなたがたの先祖に語ったのは、また彼らをエジプトの地から導き出したその日に命じたのは、全焼のいけにえや犠牲についてではなかった。(23)わたしが彼らに命じたのはこのことである。わたしの声に聞き従え。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わたしが命じるすべての道を歩むなら、あなたがたは幸いを得るであろう。(24)しかし彼らは聞き従わず、耳を傾けず、かえってその悪しき心の計画と想像に従って歩み、後退し、前に進まなかった。(25)あなたがたの先祖がエジプトの地を出て以来この日まで、わたしは朝早くからしばしば、わたしのしもべである預言者たちをあな

たがたに送り続けた。(26) それでも彼らはわたしに聞き従わず、耳を傾けず、うなじを固くし、その先祖たちよりもさらに悪いことを行った。エレミヤ書 7章22-26節

神のことは、イスラエルがエジプトを出たその日からすでに、神が彼らに望んでおられたことに反逆していたと告げています。過越の小羊を食べたその夜、イスラエルは実はキリストを退けていたのであり、彼らはその時すでにキリストを拒んでいたのです。約1500年後に起こったキリスト拒否の出来事は、過越の夜にイスラエルが行ったことの繰り返しにすぎませんでした。彼らは自分の悪しき心の計らいに従って歩んでいました。神は、過越の小羊に関する指示を通して、彼らが何をしているのかを示しておられたのです。それは彼らの罪深さを明らかにする啓示でした。実際、過越の小羊の屠りは、モーゼが最初にエジプトでイスラエルに語った、神の恵みに満ちた約束を彼らが拒んだことの現れでもありました。

それゆえ、イスラエルの子らに言え。わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプト人の重荷の下から導き出し、その奴隷の状態から救い出し、伸ばした腕と大いなるさばきによってあなたがたを贖う。(7) わたしはあなたがたをわたしの民として迎え、わたしはあなたがたの神となる。あなたがたは、あなたがたをエジプトの重荷の下から導き出す。あなたがたの神、主であることを知るであろう。(8) わたしはあなたがたを、その土地へ導き入れる。その土地は、アブラハム、イサク、ヤコブに与えると誓った土地である。わたしはそれを継承地としてあなたがたに与える。わたしは主である。(9) モーゼはこのようにイスラエルの

子らに語ったが、彼らは落胆と苛酷な奴隷のために、モーゼに耳を貸さなかった。出エジプト記 6章6-9節

イスラエルの民は、自分たちの偶像礼拝と背教を悔い改めるのではなく、エジプトでの虐げを神のせいになりました。なぜ彼らは、あれほど愛と憐れみに満ちた約束の地の申し出を拒んだのでしょうか。それは、彼らの心の中に、自分たちの状況に対する神への怒りと非難が宿っていたからにほかなりません。これこそが、過越の小羊に関わる「種（根）」なのです。もし神の御子が当時、直接彼らのもとに来られていたなら、1500年後に起こったのと同じように、彼らは御子を殺していたでしょう。

これほどの状況の中でも、神は彼らに教えることができました。殺された小羊の血を戸口に振りかけるといふ彼らの信仰の中で、神はご自身が彼らを守られることを示されたのです。主は、彼らの誤った贖いの理解を通して、ご自身の憐れみを教え始め、神のあわれみと恵みについての教育を始められました。

シナイで律法が与えられてから数週間のうちに、彼らは金の子牛の周りで踊り、従うという自分たちの約束を破りました。怒りのあまり、モーゼは神が切り出し、その上に十戒を記した石の板を砕きました。

主はモーゼに言われた。最初のものと同じような二枚の石の板を自分のために切り出ささい。あなたが壊した最初の板に記してあった言葉を、わたしはその板に書こう。出エジプト記 34章1節

第二の石板は、人間であるモーゼの手によって作られ、その上に神が書かれました。これは、神の働きと人間の働きが組み合

わさったものを表しています。民は、神がすべてを無償で与えようとされた恵み深い申し出を拒みました。彼らは、自分たちの敬虔さと善良さを示すために、自分たちで行いたいと望んだのです。そのため神は、罪が増し加わるように、彼らの心にあるものを命じられました。彼らの心は、いけにえと供え物で満たされていました。これは金の子牛の出来事に見られるとおりではありませんか。こうして神は、彼らの肉的な思いの深さを示すために、戒めを与えられたのです。

それゆえ、わたしは彼らに良くない掟を与え、彼らがそれによって生きることのできない法を与えた。エゼキエル書 20章25節

第二の石板は、人間であるモーセの手によって作られ、その上に神が書かれました。これは、神の働きと人間の働きが組み合わさったものを表しています。



どうして神が、ご自分の民に「それによって生きることのできないもの」を与えられるのでしょうか。それは、彼らが望むものを神があえて与えられるからです。人間の心は、神を犠牲でなだめようとして、どこまで旅するのでしょうか。

そのとき、王とすべての民は主の前にいけにえをささげた。 (5)
) ソロモン王は、いけにえとして牛二万二千頭、羊十二万頭をさ

さげた。こうして王とすべての民は神の宮を奉獻した。歴代誌下
7章4-5節

これらすべてのことを、いったい神はどこで要求されたのでしょうか。聖書は、神がいけにえや供え物を望まれなかったとはっきり述べています。初めに神は、アダムに対して「年に一度、せいぜい一度だけ」小羊をささげるよう命じられました。それは、アダムの心の内にあるものを示すためでした。

収穫の季節になったとき、カインは自分の作物のいくらかを主へのささげ物として持ってきた。(4)アベルもまた、自分の群れの初子の中で最良のものを持ってきた。主はアベルとそのささげ物を受け入れられた。創世記 4章3-4節 (NLT)

上の訳では、収穫の時期になると彼らがささげ物を持って来たと言われています。

日が経つうちに、カインは地の実りから主へのささげ物を持ってきた。創世記 4章3節 (YLT)

直訳すると「日々の終わりに」あるいは「年の終わりに」となり、これは収穫が行われる時期を指します。この箇所についてのジョン・ウェスレーの注解に注目してください。

時がたち一日々の終わり、すなわち一年の終わりで、彼らが“取り入れの祭り”を守った時か、あるいは週の終わり、つまり第七日であったかもしれない。定められたある時に、カインとアベルはそれぞれ、家族の祭司であったアダムのもとに、主へのささげ物を持って来た。 彼らの背教にもかかわらず、神の恵みのしるしとし

て、アダムにはこのための神の定めが与えられていたと考えるのが妥当である。ジョン・ウェスレー『創世記4章3節注解』

同じヘブライ語の語は、他の箇所では「年の終わり」「毎年」と訳されています。

あなたは、この定めをその季節に、年ごとに守らなければならない。出エジプト記 13章10節

彼の母は、小さな上着を毎年彼のところに持って来ていた。彼女が夫とともに、年ごとのいけにえをささげに上って来るときである。サムエル記上 2章19節

どうして、家族ごとに年に一匹の動物をささげることが、一人の王によって小羊12万頭、牛2万2千頭をささげることへと変わっていったのでしょうか。人々は、自分たちの想像する神を喜ばせるために、自分の子どもでさえ犠牲にするほどでした。聖書は何と言っているのでしょうか。

主は幾千の雄羊を、幾万の油の川を 喜ばれるだろうか。私の背きのために、私のうちから出た初子をささげようか。自分の魂の罪のために、自分の身の実をささげようか。(8) 人よ、主は何が良いことかを示された。主があなたに求めておられることは何か。ただ、公正を行い、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか。ミカ書 6章7-8節

神が望んでおられたのは、人々が神を信頼し、その恵みを受けて従うことでした。神は怒りをなだめるための犠牲を望まれた

のではありません。この点に関して思い起こされる聖句がこちらです。

ほとんどすべてのものは、律法によって血によって清められます。
。そして、血の流し方がなければ、赦しはありません。ヘブル人
への手紙 9章22節

なぜ律法は、「血の流し方がなければ赦し（ゆるし）も解放もない」と教えるのでしょうか。それは、律法が人間の心にあるものを映し出す鏡だからです。

それゆえ、律法の行いによって、神の御前に義とされる肉なる者は一人もいません。律法によっては、罪の自覚が生じるからです。

。

ローマ人への手紙 3章20節

人が義とされるのは、律法にある犠牲をささげる「行い」によるものではありません。むしろ、犠牲をささげようとする事自体が私たちの本性にあるものであると気づき、その罪を悔い改めることによって義とされるのです。律法は、その「罪の種」を表に出し、それが告白されるために明るみに出す役割を果たします。「血が流されなければ赦しが無い」と要求しているのは神ではありません。そう信じているのは人間であり、人間は犠牲をささげなければ神が赦してくださらないと思いついでいるのです。聞く耳のある者は、これを悟りなさい。

したがって、犠牲に関する律法は、人間の罪深い心を私たちに知らせるものなのです。私たちは聖書の言葉を思い起こします。

。

わたしがあなたがたの先祖に語ったのは、また彼らをエジプトの地から導き出したその日に命じたのは、全焼のいけにえや犠牲についてではなかった。エレミヤ書 7章22節

この言葉をトーラー（律法書）に書かれているすべてのことと調和させられる唯一の方法は、トーラーとは、人間の「なだめによる救い」を求める心を映し出す鏡であり、その中にある罪を自覚させるためのものだと理解することです。

人間は墮落した本性のゆえに、神をなだめるために何かを殺し犠牲をささげようとしますが、その墮落のただ中であっても、神はそこを通して人間にご自身が赦そうとされる御心を教え、やがて来られるメシアへと人々の目を向けさせることができました。そのメシアこそ、小羊の品性を完全に表すお方です。この小羊の品性の啓示こそが、人々の心を神へと立ち返らせませす。なぜなら、人の心を神に向けて一つにするのは、キリストにおいて現された神の御品性だからです。だからこそ、キリストはお亡くなりになる前夜にこう言われたのです。

永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。（4）わたしは、地上であなたの栄光をあらわしました。あなたがわたしにさせようとお与えになったわざを成し遂げたからです。ヨハネによる福音書 17章3-4節

もしキリストが、死の前夜に「父が与えられたわざを完成した」のであれば、神が御子に死を求めていたのではありません。神が必要としていたのは、ご自身の愛と憐れみに満ちた御品性を示すことだけでした。死を必要としていたのは人間の側でし

た。というのも、自然のままの人間には「罰がなければ赦しはありえない」と思い込む性質があるからです。人類が神の赦しを受け入れるためには、イエスが死ぬ姿を見なければなりませんでした。そのため、イエスは息を引き取る直前に叫ばれました。「成し遂げられた。』（ヨハネ19:30）

何が成し遂げられたのでしょうか。人が赦しを信じるために「見なければならなかった事柄」が完成したのです。これこそが、神が犠牲を命じられた理由でした。人間は、自分の代わりに誰かが死ぬのを見て、それによって赦しがありうるのだと信じる必要があったからです。

この問いの真の重要性を理解することは、キリストの十字架をまったく別の光の中に見ることです。それは、限りなく清く、尊く、そして魂を自由にする光です。あなたは、この光の中へ踏み出しますか？

私たちには規律がある

ある時、イエスはイスラエルの指導者たちにこう言われました。
。

あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、父の欲望を行おうとしています。悪魔は初めから人殺しであり、真理のうちに立つことができません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを語る時、それは彼自身から出るのです。彼は偽り者であり、その父だからです。ヨハネ 8:44

イスラエルの指導者たちがイエスに語った言葉は、サタンの言葉でした。イエスご自身が「彼らの父はサタンであり、その父の欲望を行う」と告げたからです。ユダヤ人の指導者たちの言葉は、サタンの思い、そして人間的な「正義」理解そのものを反映していました。

ユダヤ人たちは答えた。「私たちには律法があり、その律法によれば、この人は死に当たる。なぜなら、自分を神の子としたからだ。ヨハネ 19:7

その年の大祭司カヤパはこう言いました。「あなたがたは何も分かっていない。ひとりの人が民のために死ぬのが、国民全体が減るよりは、あなたがたにとって益になるのだ。」ヨハネ 11:49-

50

イスラエルの指導者たちは、すでに心の中でイエスを裁いていました。律法の理解によれば、イエスは死に値すると考えたのです。しかしニコデモは彼らに訴えました。

私たちの律法は、まずその人の話を聞き、その行為を知った上でなければ、裁くことはしないのではないか。ヨハネ 7:51

彼らはローマの支配がなければ、もっと早くイエスを殺していたでしょう。

ピラトは彼らに言った。「あなたがたがこの人を引き取り、あなたがたの律法に従って裁きなさい。」するとユダヤ人たちは言った。「私たちには、だれをも死刑にすることは許されていません。」
ヨハネ 18:31

イスラエルの指導者たちはモーゼの律法を「律法を犯す者には死を科すもの」と解釈していました。多くの律法違反には石打ちの刑が定められていたのです。しかしイエスは律法を別の方法で解釈されました。

律法学者たちとファリサイ人たちが、姦淫の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせた。彼らはイエスに言った。「先生、この女は姦淫の現場で捕らえられました。モーゼは律法の中で、このような女は石打ちにせよと命じています。あなたはどう言われますか。」彼らはイエスを訴える口実を得ようとして、こう言ったのである。ところがイエスは身をかがめて、地面に指で何かを書いておられた。彼らが問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。「あなたがたのうち、罪のない者が、まずこの女に石を投げなさい。」そしてまた身をかがめて地面に書き続け

られた。これを聞いた者たちは、良心の責めを受け、年長者から始まって一人また一人と立ち去って行き、ついにイエスと女だけが残った。イエスは身を起こして彼女に言われた。「女よ、彼らはどこにいますか。だれもあなたを罪に定めなかったのですか。」彼女は言った。「主よ、だれもいません。」イエスは言われた。「私もあなたを罪に定めない。行きなさい。もう罪を犯してはなりません。」ヨハネ 8:3-11

ファリサイ人たちはこの女を（男も含めて）現行犯で捕らえしました。彼らの律法理解では、石打ちにして殺すべきと考えたのです。しかしイエスは地面に何かを書き、彼らに「罪のない者が最初に石を投げよ」と告げました。その言葉によって、彼らは自らの罪を思い出し、赦しを求めることなく、自らを罪に定めるようにしてその場を去りました。イエスは女を罪に定めず、自由に赦し「もう罪を犯してはならない」と語られました。女は大きな安堵と感謝を抱いたのです。ファリサイ人たちは殺すために律法を用いましたが、キリストは救うために用いられました。

聖書を考えてみましょう。

(1)あなたの御座の基は、義とさばきであり：

(2)あわれみとまことは、あなたの御前に行く。」詩篇 89篇14節

「御座」という語の後にコロンが置かれていることに注目してください。英語のコロンは二つの独立した節を分け、後ろの節が前の節を説明する働きを持っています。つまり、神の義（正しさ）の説明とは、あわれみを示すことなのです。義とは正し

いことを行うこと、そして神にとって「正しいこと」とは、真理に照らしてあわれみを示すことです。では、神のあわれみはどれほど続くのでしょうか。

主はまことにいつくしみ深く、その恵み（あわれみ）はとこしえに、そのまことは代々に至る。詩篇 100篇5節

主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえに。（2）神々の神に感謝せよ。その恵みはとこしえに。3）主の主に感謝せよ。その恵みはとこしえに。4）ただひとり、大いなる不思議を行われる方に。その恵みはとこしえに。（5）知恵をもって天を造られた方に。その恵みはとこしえに。」詩篇 136篇1-5節

神の御視点からすれば、神のあわれみは決して終わることがありません。しかし、神を退ける者にとっては、あわれみのある「ほかの神」など存在しないため、自分の罪に対して罰を受けることを当然と考えます。そして神は、彼ら自身の誤った選択が彼らを滅ぼすことをお許しになり、その人自身が抱く「正義感」が自らの結果として成就するようにされるのです。

主は、その行われるさばきによって知られる。悪しき者は、自分の手のわざによって捕らえられる - 詩篇 9篇16節

悪しき者に対する神のさばきとは何でしょうか。神は、彼らが自ら選んだ決断の結果に落ち込むことをお許しになります。神はそれを妨げません。それこそが「正しいこと」ではありませんか。もし彼らがあわれみを求めるなら、神はそのあわれみを差し伸べ、その結果を乗り越える助けを与えることができます

。しかし、あわれみを期待せず、求めもしなければ、たとえ神があわれみを差し伸べておられても、彼らはそれを受け取ることができません。悲しいことに、多くの方は神を私たち人間と同じだと思っています。彼らは、神の正義は人間の正義と同じだと考えてしまうのです。

あなたはこれらのことを行ったが、わたしは黙していた。あなたは、わたしがまったくあなたのように思った。しかし、わたしはあなたを責め、それらをあなたの目の前に並べ立てる。詩篇
50篇21節

もし神の正義が死を要求するものであるなら、神こそが死の起源ということになります。もし神が、ご自身の被造物のひとりのいのちを、律法違反を理由に奪う意図を少しでもお持ちであったならば、死の原理は神のうちに存在することになります。しかし、父なる神の啓示であるイエスに目を向けるなら、私たちが見るのはいのちだけであり、死を見ることはありません。

イエスは彼女に言われた。「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」ヨハネ11章25節

初めからあったもの、私たちが聞いたもの、私たちの目で見、よく見つめ、手で触れたものすなわち、いのちのことばについて。
(2) このいのちは現れ、私たちは見たので証しし、父とともにあり、私たちに現れた永遠のいのちをあなたがたに告げ知らせる。
。ヨハネ第一 1章1-2節

神は、罪に対する 死の宣告 をお造りになったのではありません。罪そのものが自己破壊的なのです。罪の報酬は死です。それは、罪に携わることによって自らが 稼ぐものです。神が罪の報酬を支払うのではなく、罪そのものが自らの報酬を支払うのです。聖書は「罪 のための報酬は死」とは言っていません。罪 の報酬は死だと言っています。この違いは非常に大きいのです。

聖書は旧約の物語を通して、死の宣告 がどのように宇宙に入り込んだのかを 私たちに明らかにしています。

以前に書かれたことはすべて、私たちが学ぶために書かれたのであって、私たちが忍耐と聖書の慰めによって希望を持つためである。—マテオへの手紙 15章4節

違反に対する「死の宣告」を考え出したのはサタンです。ダニエル書の「獅子の穴」の物語には、死の宣告がどのように導入されたかの過程が示されています。

ダリヨスは、全国を治めるために百二十人の総督を任命するのが良いと思った。(2)その上に三人の大臣を置き、ダニエルもその一人にした。総督たちは彼らに報告し、王に損害が及ばないようにするためであった。(3)すると、ダニエルはその大臣や総督たちの上に抜きん出た。彼のうちに優れた霊があったからである。王は、彼を国全体の長にしようと考えた。(4)そこで、大臣と総督たちは、国政に関してダニエルを訴える口実を見つけようとした。しかし、彼が忠実であり、過ちや欠点は何も見つからないため、訴える理由を見つけることはできなかった。(5

）そこで彼らは言った。このダニエルを訴える口実は、彼の神の律法に関すること以外には見いだせないだろう。』（6）それで、大臣と総督たちは王の前に押しかけてこう言った。『ダリヨス王よ、永遠に生きられますように。（7）王国のすべての大臣、長官、総督、顧問、参事らは協議して、王に勅令を制定し、確固たる命令を定めることにしました。三十日間、王以外のいかなる神にも人にも請願をする者は、たとえ誰であっても、獅子の穴に投げ込まれるべきです。』ダニエル書 6章1-7節

この物語は、私たちが学ぶために書かれています。ダリヨス王は父なる神の型であり、ダニエルはキリストの型です。ダニエルは王に次ぐ最高位におり、王は彼を国全体の長にしようと考えていました。これが、ダニエルの下にいた者たちに嫉妬を生みました。この嫉妬によって、

ダニエルの部下であった指導者たちは、彼を標的とした死の宣告を企てました。この計画を立てたのは王ではなく、彼に提案され、その影響を知らずに署名してしまったのです。神は、サタンがキリストを滅ぼそうとした企ての結果をすべてご存じでした。サタンは神の御子に嫉妬し、多くの天使たちを巻き込み、キリストを引きずり下ろそうとしました。サタンが人類を自分の罠に引き込んだとき、神はサタンの計画が実行されることをお許しになり、それがキリストの死へとつながる道を開くことになりました。世の多くの人々は、キリストの死は「王（神）の要求を満たすため」だと考えています。しかし実際には、キリストを滅ぼそうとするサタンの隠された願望を暴露するためだったのです。

サタンが「これこそ自分の最大の勝利になる」と思ったその瞬間、彼は自らの殺意に満ちた企みを暴露し、天においてサタンへの同情は完全に消え失せました。

そこで王は命令を下し、ダニエルを告発した者たちを連れて来させ、彼ら自身と、その子どもたちと妻をもろともに、獅子の穴に投げ込ませた。獅子たちは彼らを押し倒し、彼らが穴の底に着く前に、骨という骨をことごとく砕いてしまった。ダニエル書 6章 24節

ダリヨス王は、ダニエルを滅ぼそうと企んだ者たちに、彼らがダニエルに対して望んでいたそのままの報いを与えました。同じように、天の私たちの父なる神は、サタンがキリストに与えようとした滅びを、最終的にはサタン自身が受けることをお許しになります。キリストは、十字架への道という「獅子の穴」に、一晩、そして翌日にまでとどまられました。しかし、ダニエルと同じように、復活の朝にその穴から出て来られ、ご自分を滅ぼそうとした者たちに勝利されたのです。

この物語が示しているポイントは、父なる神を敬わない者には死を与えるという考えを思いついたのは、神の御子の配下にいた者たちであったということです。神ご自身がその計画を始められたのではありません。しかし、サタンの隠された企みをすべての者の前に暴露するために、神はその計画が進むことをお許しになったのです。バビロンの総督たちが定めた律法は、王に「正義」をもたらすためのものでした。それは彼らが考える王の正義を表すものでしたが、実際には偽物の正義であり、最

最終的にその計画を企んだ者たち自身を滅ぼす結果となりました。

旧約聖書の別の物語では、王の正義と、王の息子のひとりが示した「正義」との違いが描かれています。

アブサロムは朝早く起きて、町の門への道のそばに立った。人が訴えのために王のもとへ来ると、アブサロムはその人を呼び寄せて言った。『あなたはどこの町の者か。』その人が、『しもべはイスラエルのどことこの部族の者です』と言うと、(3)アブサロムはその人に言った。『ご覧なさい。あなたの訴えは正当で、もっともです。しかし、王にはあなたの訴えを聞いてくれる代理の者がいません。』(4)アブサロムはさらに言った。『ああ、もし私がこの国の裁きつかさに任せられるならば、訴えや争いのある者はみな私のもとに来るでしょう。そうすれば私は彼らに正しい裁きをしてあげられるのに。』(5)また、人が彼に近づいてひれ伏そうとすると、アブサロムは手を伸ばしてその人を抱き寄せ、口づけをした。(6)アブサロムは、王のもとに裁きを求めて来るイスラエルのすべての人々に対して、このようにふるまった。こうしてアブサロムはイスラエルの人々の心を盗んだ。サムエル記下 15章2-6節

アブサロムという名は「平和の父」を意味しますが、その名の裏には、憎しみと戦いの性質が隠れていました。アブサロムは、異母兄のアムノンがアブサロムの妹タマルに性的暴行を加えた後、父ダビデ王がアムノンに刑を下さなかったことに激しく憤りました。そのためアブサロムは父を軽蔑し、王を打倒しようと心に決めたのです。アブサロムは自分の手で事を処理し、

「自分が正しい」と考える正義に従ってアムノンを処刑しました。その後、イスラエルの民の心を奪うための策略に取りかかりました。

アブサロムがなおも促したので、アムノンと王の子らは皆、彼ともに行った。(28)アブサロムは家来たちに命令して言った。『よく見ていなさい。アムノンの心がぶどう酒で楽しんでいるとき、私がお前たちに“アムノンを打て”と言ったら、彼を殺せ。恐れてはならない。私がお前たちに命じるのだから。勇気を出し、力ある者となれ。』(29)アブサロムの家来たちは、アブサロムが命じたとおりにアムノンに対して行った。すると王の子らは皆立ち上がり それぞれ自分のラバに乗って逃げて行った。サムエル記下 13章27-29節

サタン(元の名はルシファー)は、神の御子が高められたことに不満を抱きました。彼はそれを自分への不当な扱い、すなわち「不正」だと感じ、御子を打ち倒そうと決心したのです。王(父なる神)が介入し、ご自身の判断を明確に示されたとき、ルシファーは王国そのものを転覆させることを決意しました。そして、多くの天使たちを自分の側に引き入れました。ここで問われていた問題とは**「正義」**でした。

「ああ、もし私がこの国の裁きつかさに任ぜられるならば、訴えや争いのある者はみな私のもとに来るでしょう。そうすれば私は彼らに正しい裁きをしてあげられるのに。」サムエル記下 15章4節

アブサロムがほのめかしたのは、王は民に正義を与えていない、ということでした。しかしその主張は偽りでした。サムエル記の先の章には、次のように書かれています。

ダビデは全イスラエルを治め、その民すべてにさばきと正義を行ったサムエル記下 8章15節

ダビデは臣民に正義を施していましたが、それはアブサロムが必要だと考えた「正義」ではありませんでした。ダビデは憐れみを示しました。それは、神の憐れみが彼とともにあり、その王国を堅く立てていたからです。

彼はわたしの名のために家を建て、わたしは彼の王国の王座をとこしえに堅く立てる。(14) わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。もし彼が不義を行うなら、わたしは人の杖、人の子らのむちをもって彼を懲らしめる。(15) しかし、わたしの慈しみは彼から離れ去らない。わたしがあなたの前から除いたサウルの場合とは違って。(16) あなたの家とあなたの王国は、あなたの前にとこしえに堅く立てられ、あなたの王座はとこしえに堅く立てられる。サムエル記下 7章13-16節

アブサロムは、憐れみを示す正義の上に築かれた王国を望みませんでした。彼が望んだのは、憐れみを示さずに悪を行う者を処刑する正義でした。この物語は、天における最初の戦いを反映しています。サタンは多くの天使に、自分の持つ正義の観念こそが王国を守るために必要だと説得しました。アブサロムがイスラエルの男たちの心を盗んだように、サタンも多くの天使

たちの心を奪い、残りの天使たちもまた、彼の考えに好奇心を抱き、同情を寄せました。このことは、サタンが神の御子を殺すまでは完全には天から退けられなかったという点から明らかです。その後、彼は地上へ投げ落とされました。

イエスは彼らに言われた。『わたしはサタンが稲妻のように天から落ちるのを見た。』ルカ 10:18

その尾は天の星の三分の一を引き寄せて地に投げ落とした。そして龍は、子を産もうとしている女の前に立ち、その子が産まれるとすぐに食いつくそうとしていた。(5) 女は男の子を産んだ。その子は鉄の杖をもってすべての国々を牧するはずであった。その子は神のもとへ、その御座のもとへと引き上げられた。黙示録 12:4-5

サタンは三分の一の天使たちを自分の側へと引き連れしました。彼は地上の教会を攻撃し、ベツレヘムで生まれた神の御子を「女の子(みどりご)」であるその方を 飲み込もうとしました。キリストが天に戻られた後、サタンはついに天にいるすべての者たちの心から追放されたのです。

そして天では戦いが起こった。ミカエルとその御使いたちが龍と戦い、龍もその使いたちも戦った。(8) しかし勝つことがでず、天には彼らの居る場所がもうなくなった。(9) こうして、あの大きな龍、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれ、全世界を惑わす者は投げ落とされた。彼は地上に、またその使いたちも共に投げ落とされた。(10) そのとき私は天で大きな声がこう言うのを聞いた。今や、私たちの神の救いと力と王国、またそのキリストの権威が

現れた。私たちの兄弟たちを、昼も夜も神の御前で訴えていた告発者は投げ落とされた。黙示録 12:7-10

時間の初めに、キリストとその御使いたち、そしてサタンとその御使いたちとの間に戦いがありました。天使たちの三分の一はルシファーに従って闇へと入り、天を去りました。

自分の初めの地位を守らず、住むべき所を捨てた御使いたちを、主は大いなる日の裁きのために、永遠の鎖により暗闇の中に閉じ込めておられる。ユダ 1章6節

確かに、彼ら（墮落した天使たち）は神によって追放されました。しかし彼らが追放されたのは、彼ら自身が信じ始めた偽りによってでした（黙示録12:4）。神は、彼らの心の望みをそのまま与えられたのです。彼らは神を、厳しく無慈悲な方だと“思い込み”、その自分たちの偽ったイメージから逃げ去ったのです。

サタンは、自分の王座を築き上げようとしていました。それは神とは異なる“正義”の観念を含む王座でした。彼は神が創造したすべてを支配したいと望んでいたのです。

あなたは心の中で言った。『私は天に上り、神の星々の上に私の王座を高く掲げよう。私は北の果てにある会議の山に座ろう。(14) 私は雲の高みの上に上り、いと高き者のようになろう。イザヤ書 14:13-14

アブサロムの物語は、国全体が彼の「正義」の考え方に影響されていたことを示しています。同様に、サタンが地上の代表と

してなお天に来ることができていたという事実は、天使たちでさえ、まだ彼（サタン）の思想を完全には理解していなかったことを示しています。

さて、ある日、神の子たちが主の前に出て来た。その中にサタンも来た。(7) 主はサタンに言われた、『おまえはどこから来たのか。』サタンは主に答えて言った、『地上をあちらこちら歩き回り、うろついておりました。』ヨブ記 1章6-7節

王の評議へのサタンの出現には、アブサロムが父ダビデの側女たちを奪い、その女性たちに自らの子を宿そうとして王家の系統を汚そうとした行動に対応するものがあります。

アヒトフェルはアブサロムに言った。あなたの父が家を守るために残した側女たちのところにお入りなさい。 そうすれば、あなたが父に忌まわしい者となったことを 全イスラエルが知るでしょう。 そうなれば、あなたと共にいる者たちの手は強くなるでしょう。(22) そこで彼らは家の屋上に天幕を張り、アブサロムはイスラエルすべての目の前で父の側女たちのところに入った。サムエル記下 16章21-22節

サタンの言葉は“思いの種”であり、それは宇宙に影響を及ぼしました。アダムのうちに潜んでいた「神の御子に対する殺意の種」が、約4000年後のキリストの十字架でついに現れるまで、サタンの本当の意図は明らかになりませんでした。このことによってサタンは、自分自身の性質を神に転嫁することが可能になりました。サタンが自分の正体を隠している限り、神がどのようなお方であるかについて欺く力を持ち続けることができ

たのです。彼にその力があつたのは、彼が天使たちの最初の一人であり、他の天使たちが彼の神に関する知識に信頼を置いていたからです。これこそが、彼が神の律法を利用して悪を企むことを可能にした要因でした。

不正の座——法によって害悪を企む者が、あなた（神）と交わることができるでしょうか。詩篇 94:20

サタンは不義の座に就き、神の律法を利用して、律法の違反には死の宣告が下されるべきだと主張しました。ダニエルが獅子の穴に投げ込まれた物語は、この過程を明らかにしています。またアブサロムの物語は、王国の人々の心をつかむために「正義」の問題が利用されたことを示しています。これらすべての物語は、天で始まり地上に持ち込まれた大争闘を映し出しており、その争いの核心となる問題は今もなお変わっていません。

しかしキリストの死の後、サタンの本当の意図は暴露されました。キリストは、神がどれほど愛に満ちたお方であるか、宇宙に示されました。神が敵をも愛されること、もう一方の頬を差し出し、いかなる自己防衛もせずにも最も恐ろしい死にへりくだって従われたことをキリストは明らかにされたのです。地上でのサタンとその手先によるキリストへの扱いは、サタンの真の性質を暴き出しました。一方、キリストが示された神のご性質は、サタンとはまったく正反対のものでした。このようにして、キリストはご自身の死を通して、死の力を持つ者—すなわち悪魔—の王国を滅ぼされたのです。

子たちは皆、血と肉とを持っているので、キリストご自身も同様にそれらを備え、その死によって、死の力を持つ者—すなわち悪

魔一を打ち破るためであった。ヘブル人への手紙 2章14節 (NIV)

ファリサイ人たちは、サタンの「正義」の考えに染まっていました。そのため、彼らはキリストを殺そうと願ったのです。キリストは彼らを殺そうとしたことはなく、脅したことすらありませんでした。

大祭司は立ち上がり、イエスに言った。何も答えないのか。この者たちがあなたに対して証言していることはどうなのか。」(63) しかしいエスは黙っておられた。大祭司はイエスに言った。「生ける神によってあなたに命じる。あなたがキリスト、神の子であるかどうか、我々に告げよ。」(64) イエスは彼に言われた。「あなたがそう言いました。しかし、あなたがたに言います。いまから後、人の子が力ある方の右に座し、天の雲に乗って来るのをあなたがたは見ることとなります。」(65) すると大祭司は自分の衣を裂き、「彼は冒瀆の言葉を語った！もう証人が必要だろうか。見よ、今あなたがたはこの冒瀆を聞いた。(66) どう思うか。」彼らは答えて言った。「彼は死に値する。」マタイ 26:62-66

イエスがファリサイ人たちに ご自身の来臨の栄光について語られたとき、イエスは単に「あなたがたは人の子を見る」と述べられただけでした。一方でファリサイ人たちはキリストを死に定めました。その対比は実に鮮明です。求める者には証拠がはっきり示されています。神の正義は死を要求しません。むしろ、死を要求するのはサタンの正義体系なのです。神が御子の死をお許しになったのは、サタンの憎しみと、その王国の正義体系の本質を明らかにするためでした。

この文脈において、十字架の意味はまったく別のものへと変わります。神は「正義を満たすために」キリストの死を要求されたわけではありません。しかし人間はこう言いました——「私たちに規律がある」と。私たち人間の心には、赦しが成立するためには死が必要だとする“もうひとつの規律”が刻み込まれているのです。

しかし、私の身体の中にはもう一つの律法があって、私の心の律法と戦い、私を身体にある罪の律法に捕らわれの身に見えている。24) ああ、私はなんとみじめな人間なのでしょう！だれがこの死の身体から私を救い出してくれるのでしょうか。ローマ 7:23-24

あなたはこの「死の律法」から自由になりたいですか。違反者に死を要求する、この“正義の体系”から解放されたいですか。十字架のキリストを見上げてください。そこには、私たち全員が「正義を満たすためには必要だ」と思い込んでいた贖いの代価が示されています。十字架で満たされたのは神の正義ではありません。満たされたのはサタンの正義です。サタンこそが、人間を誘拐して神の子どもたちの心を奪い、“身代金”を要求した誘拐犯だったからです。そして私たち“誘拐された者”は、「自由になるためには死という身代金を支払うしかない」と誘拐犯の言葉を信じてしまったのです。身代金の値段を決めたのは神ではなく、サタンでした。

荒野でモーゼ

が蛇を上げたように

イエスが死なれたのは、人類が「神は私たちを赦す」と信じることができるよう、サタンの「正義」の考えを満足させるためでした。この枠組みの中で、私たちは今、イエスご自身が語られた「竿に掲げられた蛇」について検証してみましょう。

「モーゼが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければならない。」— ヨハネ 3章14節

多くの聖書学習者にとって、イエスが十字架にかけられたことと、蛇が竿に掲げられたこととのつながりは非常に神秘的に見えます。この二つはどのように結びついているのでしょうか。

彼らはホル山から紅海の道を通ってエドムの地を迂回しようと旅立ちました。しかし途中で民の心はすっかり挫けてしまいました。(5) 民は神とモーゼに逆らって言いました。「なぜ我々をエジプトから連れ出し、この荒野で死なせるのか。食べ物も水もなく、このまずいパンはもうごめんだ。」(6) そこで主は燃える蛇を民の間に送られ、蛇は人々を噛み、多くのイスラエルの民が死にました。(7) そこで民はモーゼのもとに来て言いました。「私たちは主とあなたに逆らって罪を犯しました。主に祈って、蛇を取り除いてください。」モーゼは民のために祈りました。(8)

それから主はモーゼに言われました。「燃える蛇を作り、竿の上に掲げよ。噛まれた者がそれを見上げれば生きるであろう。」(9)
そこでモーゼは青銅の蛇を作り、竿の上に掲げました。蛇に噛まれた者も、その青銅の蛇を見上げると生きました。 — 民数記 21章4-9節

蛇が現れた理由は、民がつぶやいたことによって「守りの垣」を自ら壊してしまったからです。

「穴を掘る者は自分その中に落ち、垣を破る者は蛇に噛まれる。」
— 伝道者の書 10章8節

神を敬い、その戒めを守る人は神の使いに守られています。しかし人が繰り返し神の戒めを破ると、御使いはもはや十分にその人を守ることができません。

「主の使いは主を恐れる者の周りに陣を張り、彼らを助け出す。」
— 詩篇 34章7節

「主を恐れることは知恵の初めであり、これを行う者はみな良い悟りを得る。」— 詩篇 111章10節

神が蛇を送ったのではなく、民が守りを壊したために神の使いがイスラエルの民を守ることができず、蛇が来ることを許されたのです。ところが民は「神が蛇を送った」と思い込みました。彼らの「正義」の理解は「罪は罰せられねばならない」というものでした。だから神が自分たちを積極的に殺しているのだと考えたのです。そこでモーゼに「青銅の蛇」を作るよう命じられました。青銅は地中に自然に存在する金属ではなく、神が

造られた銅と亜鉛を人間が混ぜ合わせた合金です。青銅はカインの子孫によって初めて作られました。

「ツィラもまたトバル・カインを産んだ。彼は青銅と鉄を扱う者の父であった。」— 創世記 4章22節

青銅は、人間が神によって創造された元素を融合させて作り出した人工の金属です。青銅は、聖書において時に否定的な意味合いを持つ金属として用いられます。不従順に対する呪いの一覧の中で、聖書は次のように述べています。

「あなたの頭上の天は青銅となり、あなたの足の下の地は鉄となる。」— 申命記 28章23節

イスラエルの背教と律法への違反を列挙した後、主は彼らにこう告げられます。

「民よ、イスラエルの家はみな私にとってかすとなった。炉の中で彼らは青銅、すず、鉄、鉛となり、銀のかすとなった。」— エゼキエル 22章18節

つまり「青銅の蛇」は、人間が作り出した「蛇の正義」を象徴していました。蛇はサタンを表す象徴です。

「その大きな竜、古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者が投げ落とされた。彼は全世界を惑わす者である。」— 黙示録 12章9節

イスラエル人の一部が蛇に殺され、彼らが悔い改めた時、罪は処理されたと考えました。彼らは掲げられた蛇を、自分たちの罪のゆえの「滅ぼす者」として認めました。殺された人々はそ

の罪のための犠牲であると見なされたのです。この「人間の作った正義」の象徴を通して、神は彼らに赦しと癒しを教えようとされました。彼らは自分たちの「正義」がサタンから来ていることを理解できなかつたため、神はあえて彼らの理解に合わせて導かれたのです。

同じように、キリストも「蛇の正義」に引き渡されて掲げられました。それによって私たちは十字架を見上げ、「赦されるのだ」と信じられるようになったのです。神の御子の死を通して初めて、人類は「神は赦してください」と信じることができました。これこそが私たちの心を解放する「贖いの代価」なのです。

私たちが本来の、自然な状態にあるとき、イエスは私たちの罪のために身代わりの贖いを備えてくださいました。この贖いは青銅の蛇によって象徴されています。なぜなら、それが私たちの自由のために要求された、誘拐者の代価だからです。それは「蛇の正義」を満たすものであり、その証しとして青銅（真鍮）が用いられています。これは天からの創造によるものではなく、人の創造によるものであり、特にカインの系譜に属するものです。

この章では、なぜキリストが私たちの罪のために死ななければならなかつたのかを理解するための、まったく新しい視点が提示されています。キリスト教会は、私たちの救いのために神が御子の死を要求されたのだと強く主張してきました。しかし、聖書ははっきりと次のように述べています。

「いけにえや供え物を、あなたは望まれなかった。あなたは私の耳を開いてくださった。全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、あなたは求められなかった。」—詩篇40章6節

神はこの死を要求されたのではありません。しかし、私たちがひとたびサタンの手に落ちてしまった以上、御子が私たちの身代わりに死ななければ、神が私たちを赦してくださるのだと、私たちを納得させることができないことを、神はご存じでした。

もし神が御自身の御子の死を要求されたのだとするなら、いけにえを献げることは、神礼拝の中で永遠に据え置かれる原理となっていたはずですが。しかし、実際に起こったのはその正反対でした。キリストの死を通して、罪のためにいけにえを献げるという原理そのものが終わりを告げたのです。

「彼は一週の間、多くの者と契約を堅く結び、その週の半ばに、いけにえと供え物とを終わらせる。」—ダニエル書9章27節a

同じように、キリストも「蛇の正義」に引き渡されて掲げられました。それによって私たちは十字架を見上げ、「赦されるのだ」



キリストは、いけにえと供え物とを終わらせるお方です。キリストは高く上げられ、すべての人を御自分のもとに引き寄せら

れました（ヨハネの福音書12章32節）。私たちの「青銅（真鍮）の正義」の体系が満たされ、赦しを受け入れるとき、神の御霊が私たちの内に宿り、私たちの思いは造り変えられます。もはや私たちは校長の配下にはいないのです。ひとたび私たちの思いが造り変えられるなら、もはや岩を打つ必要はなく、ただそれに語りかけるだけでよいのです。

「杖を取り、あなたとあなたの兄アロンは会衆を集めなさい。彼らの目の前で岩に語りかけなさい。すると岩は水を出す。あなたは岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませなさい。」—民数記
20章8節

残念ながら、モーセは神の指示に従って岩に語りかけることをしませんでした。民のつぶやきによって彼は怒りを覚え、岩を打つという行為によって、いけにえの象徴を示してしまいました。それによって、正義とは何か、またそれがどのように満たされるのかについての誤った理解を存続させてしまったのです。

このため、神はモーセが天に入る前に死ぬことを許されなければなりません。民は、この考えが誤りであったことを目の当たりにする必要がありました。彼らは、何かが打たれることなしに、ただ神に語りかけ、赦しを求めることを神が望んでおられたのだということを理解する必要があったのです。

人間の側にあるこの弱さによって、神のご計画が覆されることはありません。むしろ神は、私たちの正義の体系さえも用いて、私たちをキリストへと導かれます。打たれた岩という枠組みの中で、神は私たちに赦されているのだという信仰へと導き、

その後、いのちの水が岩であるキリスト・イエスから豊かに湧き出るので。

「皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。それは、彼らについて来た霊的な岩から飲んだのです。その岩とはキリストでした。」—コリント人への第一の手紙10章4節

「それゆえ、律法は私たちをキリストへ導くための養育係（訓練役）となり、それによって、私たちは信仰によって義とされるのです。しかし、ひとたび信仰が来た後は、もはや私たちは養育係（訓練役）のもとにはいません。」—ガラテヤ人への手紙3章24～25節

首の固い民に対してモーセに与えられた務めは、神の律法という鏡の中に、人間の罪深さを浮き彫りにすることでした。

「もし、石に刻まれた文字による死の務めでさえ栄光を帯びていたため、イスラエルの子らは、その顔の栄光のゆえに、やがて消え去るはずであったその栄光を帯びたモーゼの顔を、じっと見つめることができなかつたとするなら。」—コリント人への第二の手紙3章7節

人が自分自身の罪深さを見ることは、栄光あることです。生まれながらの人は自分の悪に対して目が閉ざされていますが、モーセを通して与えられた律法は、キリストにある福音を切実に必要としている私たちを目覚めさせます。それは、私たちが失われた状態にあることを明らかにする、祝福された鏡なのです。この鏡がなければ、私たちは自分の危険な状態を知ることができず、救われることもありませんでした。

「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって来たのである。」ーヨハネの福音書1章17節 NIV)

もちろん、イエスの恵みは、世界の基が据えられる前から与えられていました。そして今日に生きる私たちもまた、自分たちが失われた状態にあることを教えるために、律法というこの鏡を必要としています。

「神は、私たちを救い、聖なる召しをもって召してくださいました。それは、私たちの行いによるのではなく、御自身のご計画と恵みによるものです。その恵みは、時の始まる前から、キリスト・イエスにあって私たちに与えられていたのです。」ーテモテへの第二の手紙1章9節

律法と福音は、人類の墮落の始まりから今日に至るまで、常に共に働いてきました。人が神との完全な関係へと回復されるためには、その両方が必要なのです。

青銅の蛇の物語は、多くの理由から重要です。それは、サタンによって持ち込まれ、人類が受け入れてしまった正義の原理の要求を満たすために、キリストが高く上げられたことを私たちに示しています。同時に、イスラエルの礼拝の中心であった幕屋において青銅が用いられている流れをたどるとき、私たちはさらに確かな証拠を見いだします。それは、愛する父なる神が御子の死を望まれたのではなく、むしろ私たちが信じることができるように、御子を私たちのために引き渡されたのだということです。

「御自身の御子をさえ惜しまず、私たちすべてのために死に渡された方が、どうして、御子とともに、すべてのものをも賜らないことがあるのでしょうか。」—ローマ人への手紙8章32節

神よ、あなたの道 は聖所の中にあります

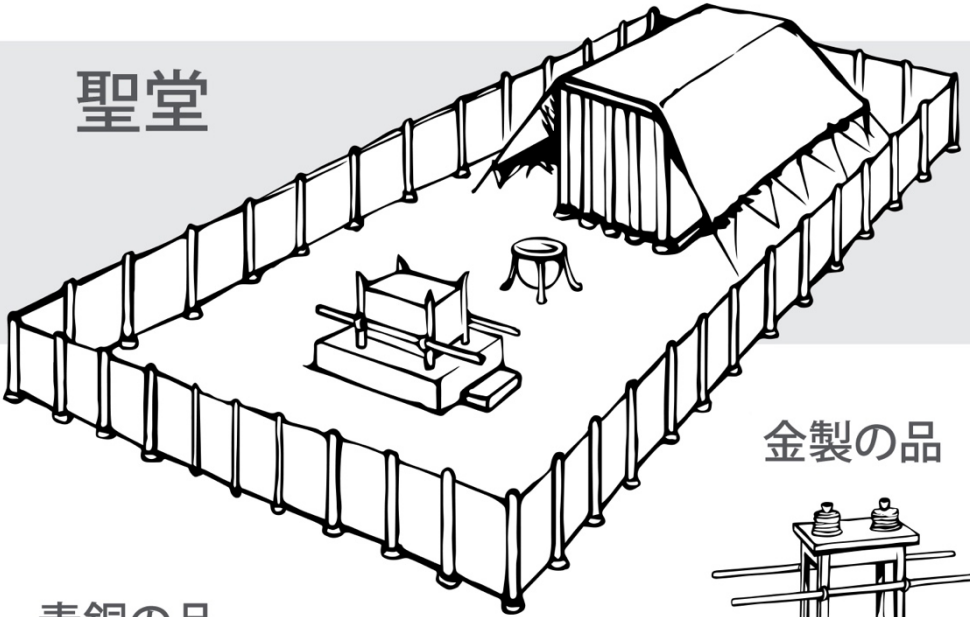
子どもの頃、私は聖書を通して読むという課題に取り組んだことを覚えています。出エジプト記に差し掛かったとき、読むのがとても大変でした。神の聖所を建てるための指示が延々と書かれていて、12歳の私には退屈で仕方がなかったのです。

しかし、その指示の中には、福音を私たちに説明してくれる貴重な真理が隠されています。よく「百聞は一見にしかず」と言われますが、ここでは聖所を一目で理解できるように、いくつかの図を用意しました。

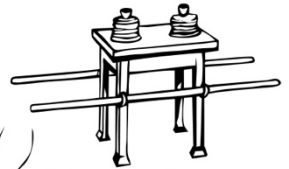
聖所の器具に使われた金属はとても興味深いものです。

家具	使用された金属	場所
犠牲の祭壇	青銅	庭
洗盤（せんばん）	青銅	庭
燭台	金	聖所
供えのパンの机	金	聖所
香の祭壇	金	聖所
契約の箱	金	至聖所

聖堂



金製の品

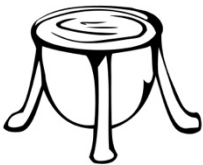


供えのパンの机

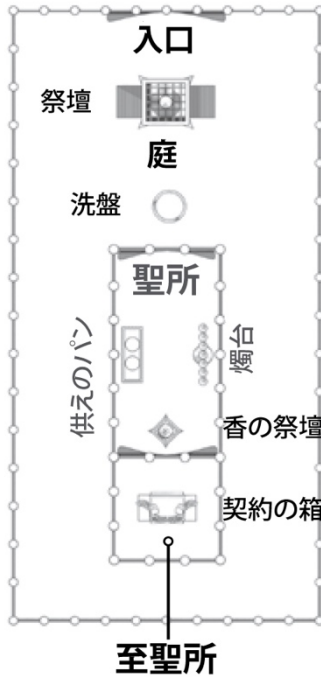
青銅の品



祭壇



洗盤 (せんばん)



香の祭壇



燭台
(世の光)



契約の箱

聖所の壁は、銀の台座にはめ込まれた金の板で造られていました。

「幕屋のために、アカシア材の杵を造りなさい。(16) 各杵は高さ十五フィート、幅二十七インチとし、(17) 各杵の下には二つのほぞをつける。すべての杵を同じ型で造りなさい。(18) 南側の幕を支えるために、この杵を二十造る。(19) また、そのために銀の台座を四十造る。各杵の下に二つの台座を置き、そのほぞをしっかりとはめ込む。(29) 杵を金で覆い、横木を通すための金の輪を造りなさい。横木も金で覆いなさい。」出エジプト記 26章15-19, 29節 NLT準拠

聖所の内側の幕は金でつなぎ合わされており、外側の幕は青銅でつなぎ合わされていました。

「幕屋は、撚り合わせた上等の亜麻布で十枚の幕を造りなさい。その幕には青・紫・緋色のより糸でケルビムを巧みに織り込むこと。(6) さらに金の留め金を五十造り、長い幕をその留め金でつなぎ合わせなさい。このようにして幕屋は一つにつながる。」出エジプト記 26章1, 6節

幕屋の天幕として、やぎの毛で織った幕を十一枚作りなさい…
(11) そして、青銅の留め金を五十作り、その留め金で長い幕の輪をつなぎ合わせなさい。こうして、その天幕の覆いは一続きのものとなる。(12) この天幕の覆いの余った一アンマ半(約45センチメートル)は、幕屋のうしろに垂らすようにする。— 出エジプト記 26:7章11-12節

福音によって聖められた人々のうちからは、すべての青銅が取り除かれる。彼らの言葉は純粋な言葉となる。

「時にかなって語られる言葉は、銀の器にある金のりんごのようだ。(12) 従順な耳に語られる知恵ある戒めは、金の耳輪や上等な金の飾りのようだ。」― 箴言 25:11-12

幕屋の外側の幕には、まだ青銅が含まれているが、これは私たちの肉体を象徴している。この青銅の糸は、キリストの再臨のときに取り除かれる。その時、朽ちるべき体は朽ちないものを着、死ぬべき体は不死を着る。

「見よ、私はあなたがたに奥義を告げよう。私たちは皆、眠るのではなく、皆、変えられる。(52) 一瞬にして、たちまち、終わりのラッパとともに。ラッパが鳴ると、死者は朽ちない者によみがえり、私たちは変えられるのだ。(53) 朽ちるべきものは必ず朽ちないものを着、死ぬべきものは必ず不死を着なければならない。」コリント第一 15章51-53節

天の都は純金で造られており、そこに住む人々の品性を表している。

「その城壁の造りは碧玉であり、都は透き通るガラスのような純金であった。」― 黙示録 21章18節

「わたしはあなたに勧める。火で精錬された金をわたしから買いなさい。そうすればあなたは本当に富む者となる。」― 黙示録 3章18節

前の章で述べたように、青銅は人間の産物です（創世記4章22節）。それは、人間の思考によって神のものを融合させようとする試みを表しています。神への道は聖所にあります。外庭から至聖所へと進むにつれて、青銅は取り除かれ、金と銀だけが残ります。私たちがキリスト者として歩みを進めるとき、外庭を後にしなければなりません。なぜなら、それは異邦人に与えられているからです。

「それから、私は測り竿のような葦を与えられた。御使いは立って言った。『立って神の神殿と祭壇と、そこに礼拝する者たちを測りなさい。(2) しかし、神殿の外にある庭は残しておきなさい。それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みこむであろう。』」
— 黙示録 11章1-2節

外庭は異邦人のための場所です。そこは青銅的思考に汚れた罪人が、初めて福音に出会う場所です。犠牲の祭壇はキリストの十字架を表しています。十字架は青銅によって表されます。つまり、それは人間の手によるものであり、人間が自らの正義の原則を満たすために必要としたものです。十字架に出会った後、神は青銅の洗盤にある鏡の中で、私たちの罪深さを明らかにされます。

「彼は洗盤を青銅で、その台を青銅で造った。会見の天幕の入口に集まった奉仕する女たちの青銅の鏡から造ったのである。」
— 出エジプト記 38章8節

人は律法の光に照らして自分自身を見るとき、自らの罪に定められる感覚が強まり、ついには命を絶望するほどになります。

キリストの御霊が来られるとき、私たちは深く罪の確信に打たれるのです。

「その方が来られるとき、罪と義と裁きについて、世にその誤りを認めさせる。」— ヨハネによる福音書 16章8節

真に神が自分を赦してくださると信じる者は、必死の状態で犠牲の祭壇のそばに立ち、贖いを仰ぎ見るとき、恵みはその人にあふれ出し、魂における真の信仰という黄金を獲得し始めます。その黄金は苦難の炉で買い取られるのです。

「しかし律法が入ってきたのは、違反が増し加わるためでした。しかし罪が増し加わったところには、恵みがいっそう満ちあふれました。」— ローマ人への手紙 5章20節

私たちの信仰の黄金が増すにつれ、かつての青銅的な思考は清められ、ついには罪の意識がなくなるのです。

「そうでなければ、供え物をささげることはやめられたはずではありませんか。礼拝する人々が一度きよめられたなら、もう罪を意識することはなかったからです。」— ヘブル人への手紙 10章2節

そのとき、もはや犠牲をささげる思いもなく、岩を打つのではなく、ただ岩に語りかけるだけとなります。

「しかし、これらのいけにえによっては、年ごとに罪が思い起こされるのです。(4) というのは、雄牛とやぎの血が罪を取り除くことは不可能だからです。(5) それで、キリストは世に来てこう言われました。『いけにえとささげ物をあなたは望まれず、ただ、わ

たしのためにからだを備えてくださいました。(6) 全焼のささげ物や罪のためのいけにえによって、あなたは満足されませんでした。(7) そのとき、わたしは言いました。「見よ、わたしは来ました。巻物の書にわたしについて書いてあります。神よ、あなたのみこころを行うために。」(8) 最初に、『いけにえとささげ物、全焼のささげ物や罪のためのいけにえは、あなたは望まれず、満足されませんでした』と言われ、これらは律法に従ってささげられるものです。(9) そのあとで、『見よ、わたしは来ました。神よ、あなたのみこころを行うために』と言われました。最初のものを廃して、二番目のものを立てるのです。(10) このみこころにより、私たちはただ一度きりのイエス・キリストのからだのささげ物によって聖なる者とされるのです。」—ヘブル人への手紙 10章3-10節

イエスは一度きりで万人のために死なれました。それは青銅の祭壇の上の青銅の蛇に象徴されています。しかし、私たちが御霊に満たされると、十字架はまったく異なる焦点を帯びます。それはキリストの美しい自己否定と、御父の御性質が彼のうちに現されたことに重点が置かれるのです。犠牲の祭壇（岩を打つこと）は香の祭壇（岩に語ること）に取って代わられます。カルバリでの血の流しは、ゲッセマネにおける血の流し、すなわちイエスが御父から与えられたわざを完成させた場面の中に置かれるのです。

「わたしは地上であなたの栄光を現しました。あなたがわたしにさせようとしてくださったわざを成し遂げました。」—ヨハネの福音書 17章4節

親愛なる罪人よ、仰ぎ見て生きなさい。神は御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではありません（ヨハネによる福音書3章16-17節）。黄金の祭壇の枠組みの中で、神は御子を遣わされ、ご自身の御性質を現し、私たちの罪責を担われました。それは私たちが神の赦しを信じるためです。

愛する御父は、こう言うために御子を遣わされたのではありません。「これはおまえたちの罪のためにわたしがおまえたちにしたはずのことだ。しかし怒りのあまりわたしの子を殺すことにしたのだ。」どんな父親が自分の子供にそんなことをするでしょうか。黄金の領域から十字架を見直し、あまりに尊いものを見出して、喜びのあまり涙するのです。

青銅の外庭を出て、黄金と銀のある聖所に入るとき、神の義は人間の義とはまったく異なることがわかります。聖書は次のように語ります。

「悪者は自分の道を捨て、不法者は自分の思いを捨て去れ。主に立ち帰れ。そうすれば主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるからだ。(8)『わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ』—主の御告げ—(9)『天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。(10) 雨や雪が天から降ってきて、地を潤し、これを肥やし、芽を出させ、種まく者には種を与え、食べる者にはパンを与えるように、(11) わたしの口から出るわたしのことばも、むなしくわたしのところに戻ることはない。必ず、わたしの望むことを成し遂げ、わたしがそのために遣わしたことを成功させる。

(12) あなたがたは喜びをもって出て行き、平安のうちに導かれる。山や丘はあなたがたの前で歌をあげ、野の木々はみな手を打ち鳴らす。(13) いばらの代わりに糸杉が生え、いらくさの代わりにミルトスが生える。これが主の名のための記念となり、とこしえのしるしとなって、絶えることはない。』 — イザヤ書 55章7-13節

私の切なる祈りは、あなたがキリストの十字架を、墮落した人間や墮落した御使いの青銅の正義から清められた、より広く美しい光の中で見ることです。恐れを取り去る力を持つ御父の愛の甘美な光の中に入ってください。

アメージング・グレイス（要約）

驚くばかりの恵み、それは甘美な響き。

罪深い私を救い出してください。

かつて迷っていた私は、いまは見いだされ、

盲目であった私は、いまは見る事ができる。

恵みが私の心に神への畏れを教え、

またその恵みが恐れを取り除いた。

初めて信じたあの時、

どんなにその恵みが尊く思えたことか。

多くの危険や苦しみや罫を通り抜けてきたが、

ここまで守られてきたのは恵みのおかげ。

そしてこの恵みが、最後には私を天の故郷へ導くだろう。

セラ (Selah)

わが愛する救い主よ、あなたは私の罪の暗闇の中に来てくださいました。あなたは私にも理解し、受け入れることのできる方法で、父なる神の赦しを確証してくださいました。あなたが私のために受けられた苦しみを思うと、私は涙します。父の深いあわれみに満たされ、あなたはこの世の暗い夜を勇敢に進み、迷い失われた貧しい羊を救い出してくださいました。

私の心はなんと鈍く、あなたが成し遂げられた現実を悟るのに遅いことでしょう。永遠ですら、あなたの愛の深さを私に完全に示すことはできません。それは尽きることのない泉であり、私はそこからいつまでも飲み続け、その味に飽きることはありません。

尊い小羊よ、私はどこまでもあなたに従いたいと願います。あなたは限りなく大きな代価を払って、私を贖ってくださいました。時には自分があなたの愛に値しないと感ずることもありますが、あなたが決して私を離れず、見捨てないことを信じています。私を慰め、祝福してくださるあなたの尊い御霊を送ってくださいましたことを感謝します。

愛する救い主よ、私は強く願います。あなたがこのメッセージの中で私に与えてくださった人々もまた、私たちと共に父の御国にいますことができますように。私は彼らに対するあなたの愛を心に感じ、その救いへの願いは大きいのです。あなたの子ど

もたちへの愛を味わい、世界が本当に父を知ることがを願うあなたの御心に、私も一つとされることを感謝します。

どうか、あなたが父を美しく栄光されたように、私もあなたを栄光することができるように、甘美な御霊を与えてください。あなたが私たちのうちに肉となって現れ、人々の心が贖いを受け入れられるようにしてください。あなたは私たちに和解の務めを委ねてくださったのですから。

どうか、この書を読む一人ひとりに、十字架の真の美しさを見る目の軟膏を与えてください。そして私たち皆が、あなたと共に十字架につけられることを恐れることなく、ついにはすべての膝がかがめられ、すべての舌があなたを主と告白し、愛する父なる神の栄光となりますように。

尊い御名によって、主イエスよ。
アーメン。

その他の書籍は fatheroflove.info で入手可能
オーディオブック版もダウンロード可能です。

Agape

旧約聖書の神が新約聖書でイエスが示された神と同じであることを聖書的証拠から深く探ってみましょう。

この書籍は、これまであまり考慮されてこなかった聖書の物語をいくつか直接的に見直すための事実を、詳細かつ体系的に検討しています。

全300ページにわたり、真剣に答えを探している人にとって大変価値のある内容です。

あなたの手にあるこの小冊子の素晴らしい続編となる一冊です。

Original Love

結婚という制度は深刻な脅威にさらされています。

なぜこれほど多くの人々が、結婚や人間関係全般において悪い経験をしているのでしょうか？

Original Love は、聖書に記された「本来の関係」を調べ、そこから私たち自身の人間関係をより豊かにし、強めることができる教訓を探ります。

全44ページにわたり、生き生きとした結婚生活のために不可欠な原則が詰め込まれています。

Identity Wars は自己発見の旅です。

それは、純粋な関係的文脈の中で、自分の価値を学ぶ招待状でもあります。

この本は、あなたがこの世の「成果主義的思考」から抜け出し、最も大切な人間関係の中で自由を見いだすのを助ける原則を明らかにします。

なぜ十字架は必要だったのか、そして誰がそれを必要としたのか？

なぜ十字架は私たちの救いにとって欠かせなかったのか？

神の怒りは御子の死によって満たされたのか？

神の義とは何か、それは私たちの義とどう違うのか？

なぜイエスはご自分を青銅の蛇にたとえられたのか？

イスラエルの聖所は、十字架について私たちに何を語っているのか？

エイドリアン・エベンズは、オーストラリア・ブリスベンに在住する国際的な著者であり講演者です。彼は愛する妻ロレルと結婚し、二人の成人した息子がいます。

